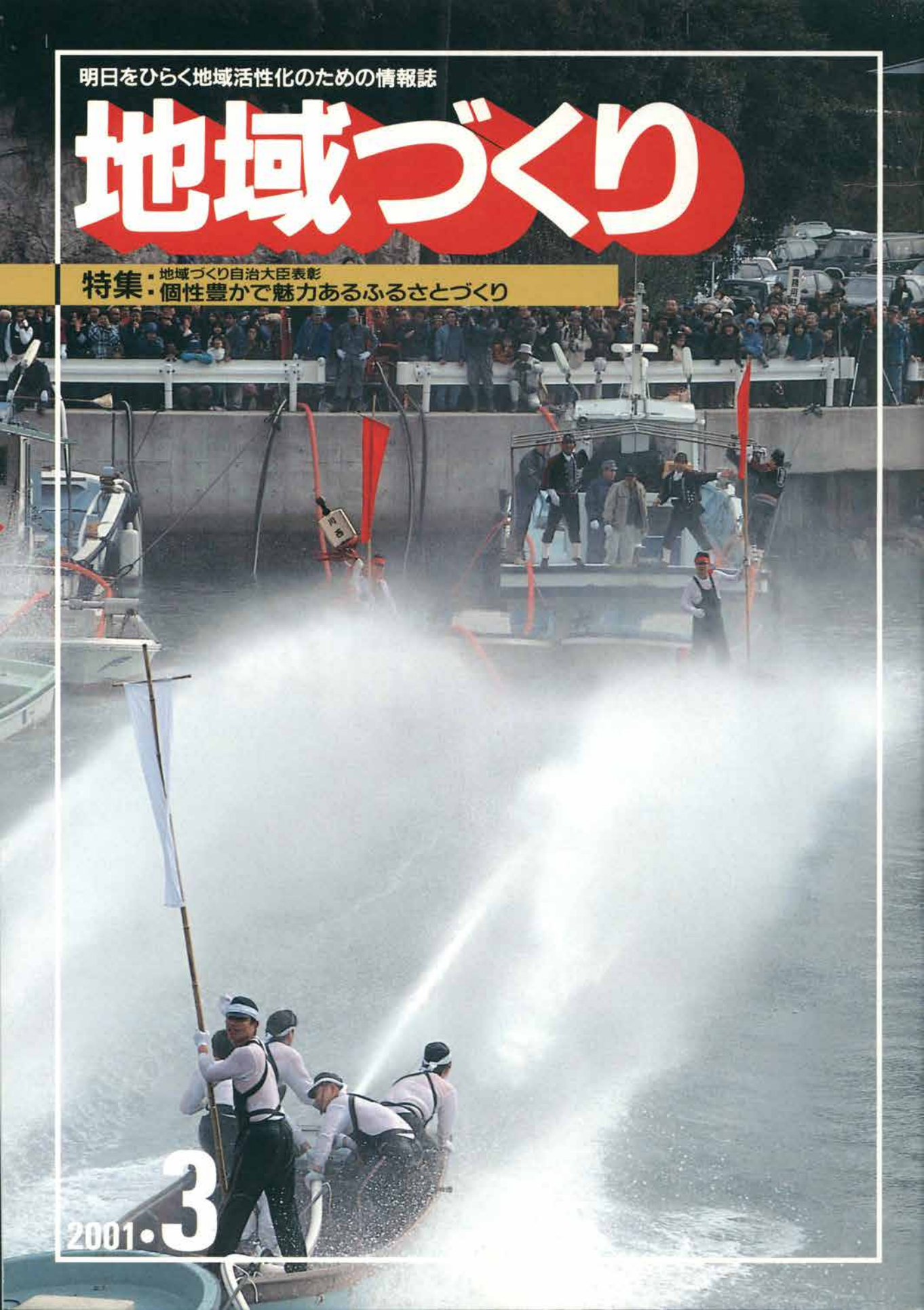


明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集・地域づくり自治大臣表彰
個性豊かで魅力あるふるさとづくり

2001.3



特集Ⅱ平成12年度地域づくり自治大臣表彰

個性豊かで魅力あるふるさとづくり

目次

平成12年度地域づくり自治大臣表彰

住民参加のまちづくり

6

大分県玖珠町6／北海道岩見沢市8／北海道沼田町8／兵庫県生野町9／兵庫県宝塚市9
岡山県新庄村10／広島県高宮町10／宮崎県高千穂町11／鹿児島県山川町11

活力のあるまちづくり

12

〈人づくり部門〉群馬県高崎市14

〈産業経済部門〉島根県海士町12

〈世界に開かれたまち〉

16

〈地方公共団体部門〉熊本県芦北町16

〈民間国際交流団体部門〉島根県松江市20

〈個性的で活力のある広域行政圏〉

28

仙南地域広域市町村圏28／飯伊地域広域市町村圏29

地域づくり団体

30

京都府舞鶴市30／北海道倶知安町32／北海道上湧別町ほか32／秋田県角館町33／福島県鮫川村33

東京都あきる野市34／福井県丸岡町34／長野県須坂市35／奈良県五條市35／徳島県徳島市36

愛媛県双海町36／高知県赤岡町37／長崎県郷ノ浦町ほか37

優良情報化団体

38

神奈川県大和市38／群馬県佐波郡東村40／長野県塩尻市40／京都府園部町41／島根県赤来町41

アイトピア岡山の実現を目指して

3

21世紀はNPOの時代!? 昇秀樹(名城大学教授)

22

21世紀に回る独楽 織田匡子(NPOふれあい独楽代表)

27

平成12年度地域活力創出プラン関連事業について 総務省自治行政局自治政策課

42

全国地域リーダー養成塾

市町村実務研修リポート(下)

45

地域だより/センター通信

46

地域づくり自治大臣表彰

1

23

都道府県漫遊/手前みそですが

47

48

表紙●源平放水合戦

(岡山県日生町)

水を掛け合う祭りやイベントは数々あるが、この放水合戦はスケールが大きい。

湾のような日生港の海面に七艘ずつの伝馬船をおよそ二十メートル向き合って並べ、消防団員たちが白のシャツ、黒の胸当て姿で



乗り込む。両側の岸壁に並んだ二台ずつの消防車から、七本のホースが伝馬船の船首まで延び、うなりを立ててポンプが海水を汲み上げ、赤旗が振り下ろされた瞬間、互いに相手に向かって放水、それもまたともに水平射ちである。ぶっ飛ばされそうな猛烈な水圧に耐えながら、相手の伝馬船めがけて水平に射ち合う。二月第一日曜日の冬の海水。約五分間とはいえ、男たちは震え上がる。フィナーレは、食紅で彩られた赤、黄、緑、七色の放水が空高く弧を描いた。広場では商工市も開催。名産の生力キ一万個がその場で焼かれ、観光客に振る舞われた。●ペン11地平線●カメラ小形又男

平成12年度

自治大臣表彰：個性豊かで魅力あるふるさとづくり

個性と魅力

「地域の個性を磨こう」「魅力を生み出そう」

こんな思いを込めて、各地でふるさとづくりが行われている。
そうした地域の活動には、たゆまぬ努力と数々のドラマがある。

今年度の自治大臣表彰も、

個性と魅力ある地域づくりに努力している多くの団体の中から、43団体が表彰された。

その奮闘記や活動の記録を、記事とカラーグラビアで紹介する。

4 兵庫県宝塚市

小学校区単位のコミュニティ活動で生まれた公園の開園式



5 岡山県新庄村

「出雲街道新庄宿町づくりの会」による観光ガイド



6 広島県高宮町

地域振興会の発案で始まった「1人1日1円募金」



住民参加のまちづくり

1 北海道岩見沢市

「きれいなまちづくり」へ河川の清掃



2 北海道沼田町

市民の活動がきっかけでできた「ほたるの里」



3 兵庫県生野町

「地域づくり生野塾」が開催する「へいこう祭」



〔産業経済部門〕■福井県勝山市
「恐竜王国・勝山」を売り出した「恐竜エキスポふくい2000」



■島根県海士町
「島じゃ常識」をキャッチフレーズにした「さざえカレー」



■宮崎県諸塚村
林業振興の三セクが経営する特産品直売所



■鹿児島県栗野町
棚田と都市住民の産直交流の一コマ「田植え作業」



■大分県玖珠町
子供が伸び伸び育つことを願う「童話の里」づくり



■宮崎県高千穂町
天孫降臨神話の里で行われる「神話の高千穂建国まつり」



■鹿児島県山川町
「花のまちづくり」の中心行事「フラワーフェスティバル」



活力のあるまちづくり

〔人づくり部門〕■群馬県高崎市
「高崎中山道元気会」が主催する夜間イベント「闇市」





石井正弘 岡山県知事

アイトピア岡山の実現を目指して 夢づくり県政の推進

二十世紀の半ばごろに生まれた者にとって、二十一世紀という時代は未来を意味していました。映画「二〇〇一年宇宙の旅」で描かれたように、宇宙旅行も実現するに違いない。「二十一世紀」という言葉自体が、私たちにそういった夢を与えていたのです。

現実には二十一世紀を迎えた今、当時の夢のすべてが実現したわけではありませんが、IT（情報技術）革命の急速な進展、さらにはヒトゲノムの解読など、さまざまな技術の進歩は、引き続き人類に未来への大いなる夢を与えてくれます。

一方、地方行政に目を移すならば、二十一世紀は「分権の世紀」、すなわち「地方の世紀」と言えます。今まさに、将来に向かっての地域づくりの夢を描き、その実現に向けた確かな戦略をうち立て、地域の独創性や多様性が発揮される真に自立した地域づくりを進めることが求められています。

本県では、先般、全国に先駆けて整備を進めてきた岡山情報ハイウェイを生かした高度情報化の次のステップとして、今後三年間を目途に、ITに関して重点的に取り組むべき方向と課題を戦略的な視点から明らかにする「おかやまIT戦略プログラム」を作成しました。

このプログラムの目標は、「アイトピア岡山」の実現です。アイトピア（ITOPIA）とは、ITを活用したユートピア（理想郷）

という意味の造語で、県土全体に、豊かな人材と高速ネットワーク環境に支えられた、全国に類を見ない需給両面にわたる魅力的な市場（ITフィールド）を築き上げ、このフィールド上でITを活用した経済活動や社会生活が活発に展開され、これを推進力（ドライビングフォース）として本県が力強く発展・飛躍することを目指すものです。

ITという多くの可能性を秘めた技術が飛躍的に高度化し、産業革命に匹敵するほど私たちの社会経済活動を変革しようとしている現在、たとえばITS（高度道路交通システム）やメデイカルネットワークによって、県民だれもがその恩恵を実感できるようにするとともに、多様なIT活動拠点・環境の整備やIT特別経済区（eトップ・エリア）の形成などを通じて、本県の経済活性化にも結びつける。こういった夢を実現する取り組みを、独創的な工夫を採り入れながら進めることは、まさに二十一世紀にふさわしい地域づくりの在り方ではないかと考えます。

新たな夢のある社会は、他から与えられるものではなく、自ら描き、その実現に向けた努力によって生み出されるものです。

私は、この立場に立ち、今後県政のあらゆる分野で、岡山県の明るい二十一世紀を切り拓く「夢づくり県政」を推進してまいります。

地域づくり自治大臣表彰〈受賞43団体〉

西田自治相、活動と功績たたえる

地域づくり自治大臣表彰



地域づくり

関連事業を積極的に推進し、顕著な功績のあった地方公共団体、広域行政圏や地域づくり団体をたたえる平成十二年度地域

づくり自治大臣表彰が決まり、昨年十一月二十七日に表彰式が行われた。

昭和五十八年度に創設されて以来、毎年重ねられてきたが、今回は中央省庁再編を前にして自治大臣表彰の名称としては最後に当たった。

表彰部門は前回と同じ六部門で、表彰団体は「住民参加のまちづくり」が九団体、「活力のあるまちづくり」が五団体、「世界に開かれたまち」が九団体、「個性的で活力のある広域

行政圏」が二団体、「地域づくり団体」が十三団体、「優良情報化団体」が五団体、合わせて四十三団体となった。部門ごとの表彰の趣旨と、今回の受賞の特色は次のとおりである。

住民参加のまちづくり

住民の積極的な参加を得ながら、地域の特性を生かしたまちづくりについて、先進的な取り組みを行っている市町村を表彰する。

今回は童話の里づくりの中で多くの児童文化サークルが誕生してきた町、小学校区単位でコミュニティが育っている市などが選ばれた。

活力のあるまちづくり

地域の自立を目指し、人づくりや地域経済新生に地域の特色を生かした創意工夫あふれる取り組みを行い、まちを活性化させた市町村を表彰する。

①人づくり部門

地域住民と有識者、行政側が地域づくり・産業おこしについて意見交換する場づくりを行っている市町村が対象で、中心市街地活性化のために地元大学と連携したところ、学生

ボランティアグループが生まれ、さらに商店街店主の組織も立ち上がった市が選ばれた。

②産業経済部門

地域ぐるみの新産業創出などに取り組んでいる市町村が対象で、特産品から独創的な「カレー」を開発した町などが選ばれた。

世界に開かれたまち

「地域国際化」において積極的な取り組みを行っている市町村と民間団体を表彰する。

①地方公共団体部門

国際交流・国際協力施策、外国人の暮らしやすいまちづくりなど、住民と一体となった地域レベルでの国際化の推進に積極的な取り組みを行っている市町村が対象。

カンボジアに学校を建設する運動を進めている町や、在住外国人を支援する「小さな国際大使館」を設置した市などが選ばれた。

②民間国際交流団体部門

地域レベルでの国際化の推進に積極的な取り組みを行っている民間の非営利団体が対象。スリランカとインドから児童を招き、学校訪問やホームステイで親睦を図っている団体



平成12年度受賞団体

●住民参加のまちづくり 9 団体

北海道岩見沢市 北海道沼田町 兵庫県生野町
兵庫県宝塚市 岡山県新庄村 広島県高宮町
大分県玖珠町 宮崎県高千穂町 鹿児島県山川町

●活力のあるまちづくり 5 団体

〈人づくり部門〉
群馬県高崎市
〈産業経済部門〉
福井県勝山市 島根県海士町 宮崎県諸塚村
鹿児島県栗野町

●世界に開かれたまち 9 団体

〈地方公共団体部門〉
岩手県盛岡市 宮城県気仙沼市 埼玉県東松山市
山口県下関市 熊本県芦北町
〈民間国際交流団体部門〉
島根県松江市 財松江市国際交流協会
徳島県神山市 神山市国際交流協会
福岡県北九州市 財アジア女性交流・研究フォーラム
宮崎県延岡市 インド国際子ども村「ハッピーバリー」

●個性で活力のある広域行政圏 2 団体

宮城県 仙南地域広域市町村圏
長野県 飯伊地域広域市町村圏

●地域づくり団体 13 団体

北海道倶知安町 くっちゃん未来21雪だるまの会
北海道上湧別町・遠軽町・丸瀬布町・白滝村 湧別原野オ
ホーツク100kmクロスカントリースキー大会実行委員会
秋田県角館町 角館企画集団トライアングル
福島県鮎川村 夢楽会議21
東京都あきる野市 秋川渓谷自然人レース実行委員会
福井県丸岡町 丸岡五徳会
長野県須坂市 信州須坂町並みの会
京都府舞鶴市 まいづる肉じゃがまつり実行委員会
奈良県五條市 新町塾
徳島県徳島市 新町川を守る会
愛媛県双海町 夕焼けプラットホームコンサート運営委員会
高知県赤岡町 土佐絵金歌舞伎伝承会
長崎県郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町 壱岐サ
イクルフェスティバル実行委員会

●優良情報化団体 5 団体

群馬県東村 神奈川県大和市 長野県塩尻市
京都府園部町 島根県赤来町



地域づくり団体

個性豊かな魅力ある地域づくりを推進し、地域の発展に寄与している住民主体の地域づくり団体を表彰する。

个性的で活力のある広域行政圏
住民の日常生活圏の拡大と広域行政への住民ニーズの多様化に伴い、広域行政圏を地域振興の一つの単位として、積極的な取り組みを行っている広域行政圏を表彰する。
今回は将来を担う子供の育成のために児童劇団を設立した広域圏と、人形浄瑠璃の保存伝承の拠点を建設した広域圏が選ばれた。

優良情報化団体

今回は「肉じゃがが発祥の地」という物語をつくって地域おこしに取り組んでいる団体などが選ばれた。

情報通信処理技術の革新を背景に、地域情報化に積極的かつ先進的に取り組み、地域振興施策や住民福祉施策の推進に成果を上げている地方公共団体を表彰する。

今回はバリアフリー情報コミュニティを構築した市や、高速通信ネットワークを構築した村などが選ばれた。

東京都千代田区の麹町会館で開かれた表彰式には、表彰団体の市町村長や地域づくり団

体代表が参列し、西田司自治相（当時）が受賞団体をたたえたあと、表彰状を手渡した。続いて各部門ごとに、代表団体が意見発表として、表彰理由となったそれぞれの地域活性化への取り組み状況や苦労話、今後の抱負を熱っぽく披露した。最後に大臣表彰の審査に当たった「新ふるさとづくり懇談会」の伊藤善市座長が「地域密着性、発展性、独創性の三つを基準に審査したが、二十世紀最後の表彰にふさわしい内容となった。地域づくりのテーマはいろいろある。失敗をおそれず、取り組んでいただきたい」と講評した。

表彰式のと、祝賀パーティが催され、会場のあちこちではふるさとづくりへのさらなる前進と飛躍を語り合う歓談の輪が広がった。

「童話の里づくり」に多くの人々が活躍

玖珠町は大分県の北西部にあり、中央には筑紫次郎と呼ばれる筑後川上流の玖珠川が東西に貫流している。高速道路により福岡市まで約一時間十分、大分市まで約一時間に位置し、東西約二七・一キロ、南北二一・五キロ、総面積は大分県内で二番目の二八六・四四平方キロである。その約九〇％が山林、原野の山間の町で、寒暖の差が激しく、夏季は高温多湿、冬季は凍結、積雪が見られる。人口は約一万九千人である。

藩主の末裔として明治七年に生まれ、明治三十六年、横浜の教会で子供たちを集めて、初めて「お話の会」を開いた。これが翁の口演童話家としてのスタートとなった。

ビュートや、その大きいメサというテーブルマウンテン状の地形で、わが国最大級といわれる二重メサ台地の万年山や大木を切った後の形に見える切株山、屏風のように岩が切り立つ岩扇山などが肩を並べるように町を取り巻いている。

翁は、「書く」童話ではなく「話す」童話に力を注いだため、彼の創作童話は少ないが、どんなところにも出かけ、訪ねた幼稚園や小学校は六千校を超えているといわれる。

「お話の会」は童話だけでなく、童謡や子供向け手品なども盛り込み、次第に開催地も全国に広げられていった。翁にはデンマーク訪問の際に、地元新聞に「日本のアンデルセン、クルシマ、オーデンセで語る」と、トップ記事で掲載されたエピソードがある。

翁の口演童話行脚五十年を記念して、弟子たちが生誕地の本町で昭和二十五年に第一回の「童話祭」を開催し、その後、「日本童話祭」と名称を変え、半世紀を超えて、毎年、続けられている。

会場も当初の一会場から、昭和五十年ごろからは四会場となったが、現在は二会場で開催している。

久留島武彦と日本童話祭

本町の先駆者久留島武彦翁は豊後森



玖珠町長
小林公明

この童話祭も、マンネリズムからの



魚のつかみどり大会

見ないまちづくりにしようと、「童話の里構想」を提唱し、子供たちが伸び伸びと育ち遊べる里をつくるというまちづくりが町民に認識されてきた。

昭和五十三年には国土庁と大分県によって地方文化活動整備の手法に関する調査が行われ、昭和五十九年に「童話の里」のまちづくりの核として、「わらべの館」を建設した。

多くのサークルが誕生

童話祭は実行委員会組織で、行政と町民が一体となった体制をとっている。

また、さまざまな児童文化サークル、地域おこしグループ、高校生のボランティアなど、地域住民による運営委員会が会場ごとに設けられ、二会場のうち、三島会場は約六百人、河川敷会場は約四百人の運営委員が祭りを盛り上げている。

海外在住の子供から応募もある全国児童生徒俳句大会では文部大臣賞を設けていただき、「おとぎ劇場」では影絵サークルなど各種サークルの共同活動、「手作り遊び広場」では別のサークル、「おとぎ登山」は地元住民の会といった



ミニSLコーナー

運営が行われている。

この間、数多くのサークルが生まれており、その一部を紹介する。

竹とんぼや竹馬などを子供たちが自分で作る喜びを味わう活動の「子ども遊びを考える会」(昭和四十九年結成)、二十四団体によって構成され、新春子ども祭りやおとし劇場などを開催している「わらべサークル協議会」(昭和五十二年)、童话祭のオープニングを担当している「玖珠少年少女合唱団」(昭和五十三年)、全国募集による創作童话集や巡回わらべ劇場で本の読み聞かせ活動をしている「つのむれ文庫」(昭和五十六年)などである。

ほかに、月一回わらべの館で「折り紙教室」を開いている主婦のグルー

プや、影絵を上演している「影絵サークルわかたけ」(昭和六十三年)、西日本子ども太鼓フェスティバルに参加している子供チームと青年チームの「久留島太鼓」(昭和六十三年)が挙げられる。

また、毎週日曜日にわらべの館で話会を開催している「ひこわの会」(平成二年)は、久留島武彦の「彦」、和やかな「和」と波紋の「輪」をもって名づけた語りべの会である。

さらに、地域おこしグループも童话祭に参加し、祭りを盛り上げている。「ひまわり会」は昭和六十年に結成され、花でいっぱい運動や、童话の里にふさわしく、童话の主人公を題材にした石像を八体設置してきた。「つのむれ会」は童话祭会場の背後に

ある角埋山^{つのむれ}の自然を守るため結成され、童话祭行事のほか、角埋クリーン登山、自然観察会などを行っている。

「くるしま水軍軒先市実行委員会」(昭和六十二年結成)は三島会場周辺在住の青年たちにより構成され、四月から十月までの毎月五日に夜市を開催している。また、旧藩主久留島(来島)氏の出身地で村上三島水軍の本拠地の一つである愛媛県宮窪町の地域づくりグループ「水軍ふるさと会」との交流も、平成四年より行っている。

「ふるさとガイドクラブ」は、童话祭でのほかに、童话祭会場となっている三島公園一帯の史跡をふだんでも案内し、ボランティアの観光ガイドクラブとして活動している。

さまざまなグループを通じた町民の

参加は、児童文化のみならず、他の行政分野にも波及している。たとえば、健康づくり推進協議会は二百九十人の委員さんが健康づくり健康運動、啓発活動に取り組んでいる。

これまではイベントを通じて文化行政に参画してきたが、これから先は児童文化施設のわらべの館や文化ホール^{こども文化センター}の維持・運営に住民の参加を進めていきたいと考えている。

まちづくりは、多くの町民により話し合いの中から前進し、そこに住む者が自ら行動し、町民と行政が一体となって取り組んでいくことが大事である。次代の主人公である子供たちが明るく伸び伸びと育つまちをつくるのが童话のまちづくりであり、息の長いまちづくりなのである。

●成功のポイント

「**童**話の里づくり」は玖珠町のまちづくりのテーマ、目標であり、日本童话祭の趣旨がその基軸となっている。行事の運営のありかたや開催日程など、常に議論し、反省を重ね、行政と住民とが一体となった取り組みが進められている。その中で、童话の里は自分たちの手でつくるものという機運も高まり、多くの児童文化サークルや地域おこしグループなどが生まれている。

時代の流れや激しい社会変化とともに、童话祭には町の一大イベントとしての期待感や住民ニーズが増大・多様化し、観光浮揚や地域産業の振興といった地域の活性化への直接的な要望も強くなっており、その複合性、多様性も求められる状況にある。

しかし、「児童文化の高揚と青少年の健全な育成」をコンセプトとし、限られた日程の間に開催される単独イベントに総合的な目的や効果を直接に期待することは難しく、年間を通じた議論、検討が重ねられている。現在、担い手の不足、開催会場など、新たな問題も浮上してきており、開催形態を変化させながら発展していく傾向にある、と言っているであろう。

●玖珠町教育委員会生涯学習課

「きれいなまち」を市民と協働

河川環境保全

「新しいふるさとづくり」をテーマとして、市民の提案・意見を施策に反映させ、市民との協働を実践している。

この中で、「きれいなまちづくり」の一環として、平成三年度から市街地を流れる利根別川と幾春別川の自然環境の保全と美化活動を、市民と行政が一体となって推進している。

四年度に「利根別川をきれいにする市民の会」、五年度に「幾春別川をよくする市民の会」がそれぞれ設立され、

河川の清掃、美化活動を実践している。

ごみの減量、再生利用

市のごみ処理三原則（「減量」「再生利用」「自然にやさしい処理」）を踏まえて、平成三年度にごみ処理場の見学会を七十三回実施、約四千五百人の市民が参加した。これをきっかけに「ごみ」のよりよい始末を進める市民会議が結成され、ごみの減量化と再生利用に取り組んできた結果、十年度の市民一人当たりのごみの量（六百九十六g）は三年度（八百七十七g）に比較して大幅に減量した。

具体的施策・活動

●河川環境対策

・利根別川クリーン・グリーン作戦（年一回）

・利根別川沿いの草刈り（年二回）

・幾春別川サケの稚魚放流壮行会

・幾春別川フラワーズライン（年二回）

・幾春別川緑の回廊づくり（年一回）

●ごみ対策

・ごみの祭典（年一回）

・ごみシンポジウム（年一回）

・クリーンランド通信発行（年三回）

幾春別川でのサケの稚魚の放流



ほたるの里を見学する子供たち



ほたる保護条例の制定

平成二年に「第三次総合振興計画」を策定し、二十一世紀に向けた新しいまちづくりとして、町内を七つのゾーンに分けた整備をスタートさせた。その中で幌新地区を「自然体験学習ゾーン」と位置づけ、「ほたるの里」を整備している。これは、昭和六十三年四月に町民によって設立された「沼田町ほたる研究会」の活動が土台になっている。その後、ほたるをまちのシンボルに位置づけ、道内初の「ほたる保護条例」を制定し、町を挙げて自然を守り育てていく機運が高まっている。

ほたるの里は広さ八畝、人工水路、ほたる観賞施設、遊歩道、ショウブ園などを配置し、運動施設や陶芸館も整

住民活動が「ほたるの里」整備促す

毎年7月に開催されるほたる祭り



備された。

ほたる研究会はほたるの飼育、放流や、多くの観光客が訪れるほたる祭りでの説明など大きな役割を担っている。さらなる展開へ

自然環境に配慮したまちづくりの機運が高まり、雪の冷気を利用した米の低温貯蔵施設や、あらゆる分野で雪を利用する方法を研究する利雪技術開発センターが整備された。

具体的施策・活動

●ほたる祭り

●各種施設整備

・幌新地区農村公園

・沼田町ほたる学習館

・オートキャンプ場「ほたるキャンプ」

・米穀低温貯留乾燥調整施設

町総合計画の策定、実行に参画

ワークシヨップと「生野塾」

平成六年に但馬地域で開催されたイベント「但馬・理想の都の祭典」が住民参加で大成功をおさめ、この原動力となった行政・住民の一体感を持ち続けようと、折しも改定時期を迎えた町総合計画の策定を、住民参加で始めた。町を八地域に分け、八十八人の住民を選出、四十三人の町職員とともに結成した地域委員会がワークシヨップによる作業を繰り返し、平成八年九月に第四次総合計画を完成させた。

さらに、住民のまちづくりへの思いが詰まった総合計画を、実施の段階でも住民参加で実行していこうと、平成九年六月、住民と町職員で構成する「地域づくり生野塾」を発足させた。

パートナーシップでまちづくり

生野塾は九つの関連施策ごとに九つのグループがあり、各グループとも、月一、二回の会議を開き、半年に一回は活動報告会を開いて情報交換している。現在は第二期の生野塾が活動しているが、「美しい清流の保全」「播但線を複線化する運動」「総合的な健康福祉ゾーンの整備」など、施策の実現に向けて、それぞれのグループが積極的に

取り組んでいる。

具体的施策・活動

- 地域づくり生野塾
- 平成九年度 延べ百八回
- 平成十年度 延べ百二十五回
- 平成十一年度 延べ八十九回
- ・町並み景観形成の啓発
- ・河川環境保全の啓発
- ・鉄道の利用促進活動
- ・各種イベントの開催



地域づくり生野塾活動報告会

20地区に「まちづくり協議会」

小学校区単位のコミュニティ

昭和六十年度からコミュニティ形成研究プロジェクトチームを発足させ、検討を重ねた結果、平成五年に小学校区単位の「まちづくり協議会」という新しいコミュニティづくりを全市民に提唱し、市長自らが二年をかけて全小学校区域を回って呼びかけた。次第に設立地区が広がり、平成七年の阪神・淡路大震災も契機となって、平成十一



花粉症から身を守る住民の地域緑化活動

年七月までに市全域で二十のまちづくり協議会が形成されるに至った。

このまちづくり協議会は、人口約一万人のおおむね小学校区を単位とし、従来の自治会、PTAやボランティアグループが参加する市民横断的な連帯を目指すもので、市民主体でまちづくりへの参加を促すのが目的。設立によって、全域に新しい祭りやイベントが広がり、高齢者への配食サービス、用水路への鯉の放流などが始まっている。七つの広域単位に協議会の「連絡会議」も組織された。

市政への提言制度

宝塚市ではさらに、女性市民による市政への研究提言委員会として「女性ボード」をつくったり、「健康」「コミュニティと情報」「安全安心」といった課題ごとの市民の研究提言委員会「課題別市民一〇〇人委員会」をつくり、住民の積極的な参加による地域づくりを推進している。

具体的施策・活動

- まちづくり協議会補助事業
- ・情報誌発行
- ・環境美化活動
- ・福祉活動

メルヘンの里で音風景フェスタ



町づくりの会の清掃活動(上)と観光ガイド(下)

「音風景」の創造

昭和五十九年度から「メルヘンの里」づくりに着手し、「音風景」をキーワードとした地域おこしを進めている。「音風景フェスタinメルヘンの里新庄」では、「サウンドマップをつくる」「音をつくろう」など五つのワークショップを開催、都市住民との交流を図り、住民参加により成功させている。

住民団体による活動の展開

県の町並み保存地区の指定を契機として、江戸時代の出雲街道新庄宿の景観維持、保全に村内の住民が積極的に取り組んでいる。

平成六年に誕生した「出雲街道新庄

(水路の流れで回転させて中のサトイモの皮をむく仕掛け)の設置、昔の屋号の設置などを進めている。音風景には関心が高く、音風景フェスタには多数の会員が積極的に参加している。

具体的施策・活動

- 音風景フェスタinメルヘンの里新庄
- ・ ワークショップ(五コース)
- ・ 音のパフォーマンスin木代邸
- 音風景ミーティング
- 出雲街道新庄宿づくりの会の活動
- ・ 観光ガイド活動
- ・ 環境整備活動
- ・ 芋車の設置などによる「音の創出」活動

宿づくりの

会」は、脇本陣

「木代邸」(村の

有形文化財)の

管理や観光ガイ

ド、小川や公園

の清掃活動に取

り組んでいる。

また「音の創

出」も活動の一

つで、音風景と

なる風鈴や芋車

八つめの住民自治組織と連携

振興会を通じた住民参加

昭和四十七年以降、町内に八つめの住民自治組織「地域振興会」が誕生し、町では振興会との対話の場として地域振興懇談会を開催するとともに、小集落単位の勉強会を開いて人材の育成を図ってきた。

こうした素地があつて、六十三年に新しい産業と雇用創出のために「虹の家族村構想」を策定し、中核となるレジヤ―施設を誘致する際には、住民組織が用

地交渉や農業用水の権利調整などに当

たり、町はアンテナショップの開設や

第三セクターによる六次産品開発を進

め、グリーンツーリズムを定着させた。

また、平成二年に「全町公園化構想」

を策定し、振興会ごとに地元資源を生

かした拠点施設を整備し、拠点レジヤ―

施設とのネットワークによる相乗効

果を生んでいる。

高齢者給食サービス

このように、住民の自主性を最大限に発揮できる信頼関係が築かれ、諸施策を次々と展開する好循環を生んでいるが、このほかにも一人一日一円募金による独り暮らし高齢者への給食サービスやフラワ―ロード整備など、振興会が提案するユニークな案を行政が後押しすることによって、地域の活性化を着実に進展させている。

具体的施策・活動

- 各種施設整備
- ・ エコミュージアム川根(地域の食材による料理の提供など)
- ・ ほたるの里(水路清掃、学習会、ほたるまつり)
- ・ 面山森林公園(都市住民との交流)
- ・ たかみや湯の森(住民が管理)

地域の将来像をみんなで描く(薬師集落)



天孫降臨の神話で建国まつり

神話を活用したまちづくり

天孫降臨の地として知られる高千穂町には、神楽などの伝統行事や、神話に出てくる地名がたくさんある。地元商店街と青年団では、観光客が減少する冬の観光客誘致対策として、昭和六十一年に第一回の「神話の高千穂建国まつり」を開催した。

以後、毎年続けられ、平成十一年にマンネリ化から抜け出すために、商店街若手が実行委員会を結成したときから、町も支援している。まつりは実行委員会の自由な発想に任せられ、歩行

者天国、神々のパレード、神楽上演、国引き大会（綱引き）など、自由で古代色豊かなまつりに育っている。

また、天岩戸神社秋季大祭における「岩戸投げ大会」や「神話の里フェスティバル」など、神話などにちなんだイベントを、住民の積極的な運営参加で運営している。

このように、町内各層が一丸となってまつりを企画・運営し、地域の伝統文化の維持・保存と地域の活性化が図られている。

交流事業への展開

昭和六十二年には、天岩戸神話が残る長野県戸隠村と姉妹提携し、両町村で岩戸投げ大会や小中学生のホームステイを通して、交流を深めている。

また、新たな観光名所として、町内各所に神楽の彫像やレリーフを設置し、「神話の里・高千穂」をアピールしている。

具体的施策・活動

- ・ 建国まつり
- ・ 神話の里フェスティバル
- ・ 長野県戸隠村との姉妹交流
- ・ 町内各所に神楽の彫像、レリーフの設置

長野県戸隠村からのホームステイ



住民総参加で花のユートピア

花のまちづくりへの住民参加

温暖な気候を利用した切り花生産が古くから盛んで、県の園芸施設や日本最大級の花のテーマパークも立地している。このような地域特性を最大限に生かした個性的なまちづくりを目指すと、平成元年、「花のまちづくり整備基本計画」を策定し、町民総ぐるみで取り組んでいる。

この町民総ぐるみ運動では、主要道路の道路端への花木植栽、老人クラブや子供会による花壇の管理、各学校の花いっぱい運動がある。集落内の公民館、公園は住民のボランティア活動によって、四季を通して花で飾られ、家庭の庭先なども花による装飾で工夫されている。

花のテーマパーク周辺では、生産農家と連携した「花狩り」や「花誘便（郵便）」が行われ、毎年三月には全国で一番早い花のイベントとして「フラワーフェスティバル」も開催され、また「花と緑のコンクール」によって、花のまちづくりへの町民の意識を高めている。

今後の展開

町は各団体に花壇の管理を依頼し、花苗の配布と花壇管理報奨金を支払っ

地域の老人クラブによる花壇の管理



ている。

今後は、町民一人ひとりがさらに花のまちづくりを意識し、地域に根差した取り組みとして深く浸透させ、花のまちとしてのイメージを内外にアピールし、観光や産業の起爆剤としていくことを目指す。

具体的施策・活動

- ・ 花とびあ山川
- ・ フラワーフェスティバル

島じや常識「さざえかじ」を商品化

〈産業経済部門〉島根県海士町

海士町は、島根半島の北東約六十
〜八十キロの日本海に浮かぶ隠岐諸島の
中で島前三島の中央に位置する「中の
島」である。一二一年の承久の乱に
敗れた後鳥羽上皇の配流の地でもある。

面積三三・四四平方キロの小さな島で、人
口は昭和二十五年度の約七千人を最高に
減少の一途をたどり、過疎化・高齢化
がどんどん進む中、本年度の国勢調査
では約二千七百人にまで減少している。

基幹産業は、漁業・農業と観光業で
あるが、漁獲量の減少と市場価格の低
迷により、漁業を取り巻く環境は大変
厳しく、農業においても高齢化や後継
者不足で遊休農地の出現など多くの問
題が生じてきている。

婦人加工グループが 研鑽積んで

このような状況の中、今後のまちづ
くりの方向性として、ハード先行の基
盤整備から、観光や特産品開発と一体

化した一次産業の振興を目指し、新し
い産業おこしによるまちづくりを目指
している。

その一つが、「島じや常識」「さざえか
じ」の開発・製造・販売である。今
でこそ、肉は珍しいものではないが、
以前は高価で貴重なものであり、その
代用品として地場資源のサザエを使用
した「さざえカレー」の食文化が海士
町にはあった。町内の各家庭で古くか
ら食してきた、この「さざえカレー」

に着目して、レトルト化に挑戦した。

この取り組みは、平成八年度に島根
県の県単補助事業（住んで幸せしまね
づくり事業）を活用して始まった。開
発コンセプトの確立とレシピづくりを
専門家に委託し、試食品づくりを地元
の婦人加工グループが取り組み、材料
の切り方やだし汁の取り方といった料
理の基本的なことから指導を受けなが
ら、三年間かけて完成させた。

当初はレシピどおりの味が出せず、
地元住民には受け入れてもらえなかつ
た味も、試行錯誤を繰り返すうちに、
広島や大阪などで行った試食販売会
では多くの評価を得るまでになった。さ

らに味の安定化に向けて研鑽を積み
ながら、民間会社のマーケティング調査
やレシピの数値化、食品製造販売に関
する衛生管理指導によって準備を進め
てきた。事業の運営母体もJAに位置
付け、平成十一
年度にはいよいよ
商品の製造販売
がスタートし
た。

初年度は製造
量の問題もあつ
て、隠岐島内の
限定販売であつ
たが、製造工程
を合理化し、調
理機器も更新し
て、本年度から
は島外での販路
も開拓できるま
でになり、順調
な滑り出しをみ
せている。販売
開始以来、あら
ゆるメディアに
紹介され、「島じ



や常識」というフレーズとともに海士
町のPR役としても大いに成果を上げ
ている。

婦人グループの活動がJAへの委託
事業へと発展したことにより、婦人グ



海士町長
石倉郁郎



イベントでの販売

ループが雇用され、新たにパート雇用も生まれる一方、原材料品の地元生産量の拡大やさらなる雇用の拡大の効果を期待しているところである。

2番、3番バター商品も開発

また、「さざえカレー」の製造販売が、ものづくりに対する住民の意識変革へ一石を投じ、次の展開に意欲をみせる人々も生まれてきている。「さざえカレー」の開発は、町の一番バターであり、続く二番バター、三番バターの呼び水にもなったのである。

まず、特産品開発の視点から、全国名水百選の「天川の水」を活用したもののづくりに着目し、地元酒米「改良雄

町」とタイアップした地酒づくりによって、海土の旨酒「承久の宴」を製造した。この名称については、全国公募を行ったため、海土町のPR役も果たしている。純米吟醸酒の上品でキレイのある味に仕上がり、土産品や贈り物として地元住民も利用しているところである。

また、「岩がきのブランド化」にも取りかかった。岩がきは、全国市場でも天然物の取り引きが行われているが、資源が少ないために市場は大きくない。ところが隣の西ノ島町で岩がきの養殖に成功したことから、島前三町村の中で岩がき養殖への取り組みが始まり、三町村の生産者で協議会を発足させた。海土町としては、すべてが手作業であった岩がき養殖の作業工程の一部機械化を検討し、生産者の協力を得ながら、洗浄・種分けの機械開発を進めるとともに、岩がきのPRを展開してきた。また、生産者側も養殖用ロープのオーナーを募集し、住民の意識づくりを求めたところ、予定していた二百本すべてを完売した。

これを受けて、町としてミニ岩がき祭りを開催し、関係者を集めて養殖現場や岩がきの成長状況の視察を行った。その後、商品開発研修生が作った世界各地の料理に岩がきを組み込んだ料理

●成功のポイント

専 門家のつくったレシピに基づいて、地元のイベントで「さざえカレー」のPRを展開するが、当初は狙いどおりの味が出せず、多くの不評を買った。翌年度、レシピどおりの商品づくりを目指し、再び専門家の指導をお願いした。婦人グループが材料の切り方やだし汁の取り方といった料理の基本的なことから指導を受けた。本町の担当職員も一緒になってシェフの指導を受け、ついにはフランス料理もOKというほど自信を持つようになった。

こうして生まれたレシピどおりの味も、地元住民の大半の人に受け入れてもらえなかった。しかし、広島や大阪などのイベントの試食販売では、消費者データからは7割近い方から評価を得るという予想以上の結果を得た。地元の評価も大切だが、あえて都市部の人たちの評価を優先させた特徴のある味にこだわった結果が、成功の要因の一つとも思われる。

こうした「さざえカレー」の取り組みは、まちづくりの起爆剤になっており、これからも発想や視点を変えて、さまざまなことに取り組んでいきたい。

●海土町企画振興室

のものとなっている。

こうした取り組みによって、地元でも岩がきに注目する機運が高まってきている。岩がき養殖が企業化され、雇用の場が創出されたり、自ら事業にチャレンジする若者のU・I・ターンを促進し、定住対策にもつながってきており、町としても引き続き支援を続けていくと考えているところである。

本町は、平成元年度からの第二次総合振興計画に基づき、ホテル建設、海中展望船建造、スキューバダイビング関連施設整備などの基盤整備を行ってきたっており、平成十年度末に策定した第三次総合振興計画「キンニャモニャ（地元民謡）の変」は、これら既存施設の活用を目指したソフト事業中心

の編成による事業検討を進めている。二十一世紀に向けたまちづくりの第一歩をスタートしたばかりの取り組みが、このたびの栄えある賞をいただいたことは誠に心強く、これをさらなる励みとして、地域住民と一緒に活力ある地域づくりに取り組んでいきたいと思っている。

中心市街地の活性化

学生グループが活躍

平成十一年に高崎市が中心市街地活性化基本計画を策定するとき、市立高崎経済大学という地域資源を生かし、学生の視点に立ったまちづくりをしようという発想から、空き店舗を利用し、前線基地ともいえるべき「たかさき活性剤本舗」を設置した。

市は事務所借上げの仲介、賃貸費用や光熱水費の負担などを支援した。学生と市職員が常駐し、市民に立ち寄ってもらい、まちづくりの意見を提案してもらったり、衰退が著しい十七商店街を対象としたアンケート調査の実施、土地利用状況や空き店舗状況の調査、商店街に配布する広報誌「活性剤だより」の発行、高崎まつりや人情市などイベントへの参加を行ってきた。

地域を支える人づくりへ
学生の活動に刺激を受けて、地元商店街の店主たちが、自分たちで商店街の活性化を考える「高崎中山道元気会」を組織した。月一回、学習会を開催しているほか、デパート跡地にオープンさせた「やたい屋」を若手経営者に運営

高崎中山道元気会のイベント「中山道お茶会」おせめぐり



させている。

中心市街地活性化計画に向けて、学生グループの活用と支援から始まったことが、地域住民たちによって自ら考え実行する人材を生む活動へと発展し、自分たちの手でまちづくりをしていこうという機運が高まっている。

具体的施策・活動

- まちうち再生総合支援事業
- ・ 「たかさき活性剤本舗」開店
- ・ 「闇市」（ナイトバザール）開催

日本一の発掘地

福井県が平成元年から二年間、勝山市北谷町で恐竜の化石の発掘を行った結果、多数の化石を発見し、日本一の恐竜化石発掘地となった。この地域資源を生かし、新しい観光施設の整備による観光振興と、観光協会を通じた恐竜関連商品の開発・販売による産業の活性化を図っている。

平成十一年度には、観光施設整備事業として観光案内所兼休憩所、恐竜ゲートサイン、恐竜モニュメントを設置し、「恐竜王国・勝山」のイメージアップとまちのにぎわいづくりを推進した。勝山市のシンボルとして親しまれている。

「恐竜エキスポ」を活用

平成十二年に勝山市に県立恐竜博物館が完成、これを記念してこの年に開催された「恐竜エキスポふくい2000」では、パビリオンの設置、観光情報発信や、関連グッズの開発・販売に全力投球した。

また、市民レベルでエキスポを成功させようと、ボランティアセンターが設立され、期間中、市民の自主的な運営で車いすの貸し出しや会場案内、環

「恐竜王国」の推進

（産業経済部門）福井県勝山市

恐竜エキスポメモリアル足跡採取のボランティア活動



境美化活動が行われた。市では、このエキスポを契機に定着しつつあるボランティアの機運を今後のまちづくり活動に生かし、観光振興を促進したいと考えている。

具体的施策・活動

- 「恐竜王国・勝山」推進事業
- ・ 十一年度「恐竜モニュメント」設置など
- ・ 十二年度「勝山市パビリオン」設置など

宮崎県諸塚村

林業立村への担い手確保



放牧中の和牛

林の適正管理を行う公益事業を中心に、特産品の販売、ハーブ園の管理運営、釜茶の製造などの収益事業を行っている。

牛を林間放牧

平成八年から、村、畜産農家、大学の協力で、山林管理の省力化と牛の飼育コストの低減を目的に、山林で和牛を放牧する研究も始めている。

また、平成十年度に旧家の空き家を改築し、囲炉裏やかまど、五右衛門風呂など、昔の農家の暮らしを再現した宿泊施設を整備した。この宿泊施設を拠点に、シイタケの栽培や茶摘みを体験してもらう体験ツアーを実施し、地域の資源を生かした交流人口の拡大事業にも積極的に取り組んでいる。

過疎化・高齢化で低下していた地域の活力を増進させ、森林理想郷づくりを進めるむらのイメージを向上させている。

具体的施策・活動

●第三セクターの設立

- ・林産部門
- ・特産品直販部門
- ・畜産部門
- ・ハーブ園部門

三セウ「ウッドピア諸塚」
山林が村の九五%を占める諸塚村は、「林業立村」を目標としてきたが、木材価格の低迷による生産者の意欲減退や担い手不足が問題となってきた。
そこで平成二年に、若い担い手集団として全国でも珍しい「国土保全森林作業隊」を創設。村内の林業後継者五人を採用し、公務員に準じた給与・身分を保障した。
平成七年に、より強固な組織とするため、第三セクター「財ウッドピア諸塚」に改組、二十五人を雇用した。森

鹿児島県栗野町

棚田米をブランド化

特産品商談会で好評

栗野町の幸田地区は、昔ながらの棚田が残っており、町では年々衰退する農業の活性化と情報発信を目指してきた。平成七年に高知県で開かれた第一回棚田サミットに参加、翌年、鹿児島市で開催された「むらおこし特産品商談会」に町とJAが参加して棚田米を出品したところ、好評を得た。

これに意を強くして「栗野町幸田棚田米」のネーミングでブランド化、取



棚田の田植え参加

引先デパートで販売するほか、県内外で開催される物産展にも出品している。また産直交流として、鹿児島県内の家族に、田植えから稲刈り、収穫祭まで参加してもらっている。

紅白二色の日本酒

米だけでは東北に勝てないというこで、平成八年に行行政、生産者、小売店で「棚田米で酒をつくる会」を発足させた。棚田米と、日本名水百選の「丸池湧水」、さらに棚田から採取した土から分離して取り出した酵母菌の三つを原料とした日本酒づくりに取り組み、平成九年に焼酎王国・鹿児島では初の日本酒「幸寿」が誕生。第二弾として赤米と焼酎麴を使用した赤色の日本酒を開発し、十一年度から「朱粋」のネーミングで売り出したが、健康に良いとされるクエン酸やポリフェノールを含んでいて女性にも人気があり、また「幸寿」と併せて紅白の縁起物として販路拡大が見込まれている。

具体的施策・活動

- ・棚田米の販路拡大
- ・日本酒の開発・商品化

学校で家庭で、町挙げて海外と交流

〈地方公共団体部門〉熊本県芦北町

芦北町は熊本県の南部、葦北郡の中央に位置する。東部には日本三大急流の一つ球磨川が流れ、西部には不知火海を挟んで天草諸島が横たわり、美しい海と緑あふれる豊かな自然に恵まれた人口約一万七千人の町である。

その不知火海に面した県立芦北海岸の背後地にある「芦北海浜総合公園」には、ニュージーランド生まれのノンエンジンカート「ローラーリユージュ」の公認コースが平成十二年七月、九州では初めてオープンし、自然にやさしい乗り物として多くの来園者で賑わいを見せている。

また、近世初頭に築城された加藤清正公ゆかりの県指定史跡・佐敷城跡からは平成八年、のちに県重要文化財となった「天下泰平国土安穩」の文字入り鬼瓦が出土したことから、城跡麓に日本一の大瓦モニュメントを設置し、各地に世界平和をアピールしている。



芦北町長
竹崎一成



カンボジア学校建設募金

年間の検討を経て将来の国際化についての答申を受けた。この中に「国際化・国際交流の基礎をつくるべき組織の形成が必要」との提案があったことから、これを受けて平成八年十二月に「芦北町国際交流友の会」が発足し、民間レベルでの国際化・国際交流推進のための体制づくりがなされた。

友の会では、さらに活動の充実や取り組みのレベルアップを図るため、平成十年度に各分野ごとの部会を設置し、より組織が充実した「芦北町国際交流協会」と名称が変更された。

協会では、内戦で教育環境が荒廃しているカンボジアに学校を建てるための募金活動に取り組んでいる。その結果、平成十三年三月末には現地カンボジアに念願の小学校が完成し、開校式が開催できる運びとなった。

この「カンボジア学校建設募金運動」は当初、町立佐敷小学校で児童たちの自主的な話し合いの中から生まれ、毎年チャリティーバザーを実施し、売上金の一部を募金としたのが始まりであった。

その後、協会が主体となり、夏祭り

や町内で実施される各種イベント時には募金箱を設置し、地域の子供たちと一緒に募金活動を行った。活動は次第に町内各学校へ、全町民へと広がり、募金開始から約三年半で目標額に達することができたのである。

この募金活動では、町外のある県立高同窓会有志の方々から恩師を追悼する文集の売上金の一部が募金に寄せられ、ほかにも匿名で多数の方から多額の募金をいただいた。まさに町民挙げてのカンボジア学校建設募金であった。

さて、地域の国際化という場合、その活動には国際交流、国際協力、国際支援の三つが考えられる。カンボジア学校建設はこのうちの国際支援に当たるだろうが、そのほかの国際交流や国際協力についても、わが町の具体的な取り組みを紹介してみよう。

町民参加型の国際交流

国際交流では中学生から成人まで、幅広い年代で展開されている。中学生を対象としたマレーシアと米国モンタナ州への派遣事業、国際理解人の育成を目的とした教職員・一般町民・町職

●成功のポイント

本 町の国際交流は、芦北町国際交流協会を中心に、さまざまな場面で展開されている。

協会でこれまでに取り組んできた事業には、インドネシア、英国、ドイツからのホームステイの受け入れや、町民を対象とした外国語講座の開催などがあり、身近な国際交流を図っている。

また、募金活動で建設したカンボジア学校へは、今年3月末に会員を派遣して開校式に列席し、カンボジアの子供たちとの交流活動も行い、現地とのつながりを深めることになっている。

このほかにも、協会は、海外を見聞し、理解することで本町のグローバル化の先導者となる人材を育成するために、町が主催する英国海外派遣事業に会員を参加させている。

県立芦北高校では、今年度も9人程度が3月下旬から、フィリピンの森づくりのボランティア体験学習に参加する予定である。

このように、本町の国際化は各学校や団体はもちろんのこと、町民を含めた町全体で取り組んでおり、その推進・展開にあたっては多大な協力を得ている。

●芦北町企画財政課

国際協力では、熊本県が実施する海外技術研修員受け入れ事業として、毎年カンボジアからの研修生を受け入れられている。本年度は芦北町の小学校で実施されている。

さらに国際協力では、町からエジプト、コスタリカなどに青年海外協力隊のメンバーとして参加している。そこで町では、青年海外協力隊などに町職

員の英国海外派遣事業、農業後継者のための海外視察研修事業、そして文化交流を目指した地元伝統芸能「棒踊り」保存会のハワイ、マレーシア使節派遣など、町民各層で交流事業が展開されている。

また、町民自ら積極的なホームステイの受け入れが行われている。年によって人数に違いがあるが、十一年度の場合は五カ国から三百人近い外国人が訪れた。これらの人たちが滞在したホームステイ先の家庭では、それぞれの国の方々との「ふれあいの場」づくりが進んでいる。

また、町民自ら積極的なホームステイの受け入れが行われている。年によって人数に違いがあるが、十一年度の場合五カ国から三百人近い外国人が訪れた。これらの人たちが滞在したホームステイ先の家庭では、それぞれの国の方々との「ふれあいの場」づくりが進んでいる。

また、町民自ら積極的なホームステイの受け入れが行われている。年によって人数に違いがあるが、十一年度の場合五カ国から三百人近い外国人が訪れた。これらの人たちが滞在したホームステイ先の家庭では、それぞれの国の方々との「ふれあいの場」づくりが進んでいる。



国際青少年音楽フェスティバル

員が参加しやすくなるため、派遣中の身分と帰国後の職場復帰を保証する「外国の地方公共団体の機関等に派遣される職員の処遇等に関する条例」を平成十二年六月に制定した。町村レベルでは全国でも珍しいことであると自負している。

ところで、国際交流の取り組みの特徴として、例年、多彩なイベントが実施されていることが挙げられる。平成七年度には、世界の料理や音楽を町民とともに楽しむ「国際交流フェアin芦北」が開催された。これは海外二十二カ国からの留学生や研修生をはじめ地元親子約三百人が参加、食文化を通じた町民との交流が持たれた。

そのほか、「熊本国際青少年音楽フェスティバル」など、現在もなお、多彩な行事に取り組んでいる。

学校建設募金については、さらに二校目に向け活動を展開する予定である。芦北町における国際化・国際交流事業は「世界の平和、地球上の人類が全て幸せになること」が基本的なコンセプトである。町民と一体となった活動が評価され、今回の自治大臣表彰受賞となり、町民一同、さらなる活動の展開に向けて大きな励みとなった。

芦北町の国際化活動は、二十一世紀においても、行政、町民が一体となった活動展開を図っていきたいと考えている。

豪州、フィジーなどと交流

英語講師の招へいがきっかけ

地域に根差した世界に開かれたまちづくりをするため、昭和五十八年にオーストラリアから英語講師を招へいた。当時、自治体独自で外国から講師を招く例はあまりなく、先駆的役割を演じた。現在までに十一組二十二人を招いたが、帰国した講師が高校生を引率して日本を訪れ、藤沢町でホームステイしている。この間、現地に共同でセミナーハウスを建設したり、三つの高校に友情のシンボルとして石灯籠を寄贈している。

も始まり、陶芸研修生を受け入れたり、小学校同士の絵画交流に発展している。ベトナムとも交流

また、ベトナムとの交流も行われている。日本語を勉強しているベトナム人学生の研修受け入れが目的だが、民族楽器演奏者を招き、学校やコンサートホールなどで演奏会を開いたり、ベトナムの文化、生活慣習の理解を深めるセミナーを開いた。

具体的施策・活動

- ・英語講師の独自招へい
- ・中高生ホームステイ短期留学事業
- ・日越教育交流事業



(上)ベトナム・ホーチミン市からの日本語を学ぶ学生招へい事業
(下)オーストラリア・ブラックウォータールに藤沢町国際交流セミナーハウス建設

- ・フィジー国際交流事業
- ・郷土芸能海外公演
- ・セミナーハウス活用事業
- ・日本庭園支援事業
- ・町民の翼海外研修事業
- ・国際友好親善の町推進
- ・オーストラリアの高校との友好協定締結

世界に開かれた国際水産文化都市

漁業・水産研修生を受け入れ

全国屈指の漁業基地である気仙沼市の優れた技術、とくに水産加工と遠洋漁業の技術指導を通して、友好関係先の都市の経済発展に貢献するため、水産関係者と行政が一体となって漁業・水産加工研修生を受け入れている。

平成七年度からはインドネシアから漁業研修生を、十年度からは中国・浙江省舟山市から水産加工研修生を受け入れる一方、舟山市には隔年で訪問団を派遣している。

「小さな国際大使館」

漁業・水産加工研修生の受け入れと

は別に、平成四年度から中学生を米国シアトル市に派遣している。中学生らは現地の家庭にホームステイし、各種の交流を通じて国際感覚を学んでいる。

気仙沼市の国際交流活動で特筆すべきは、平成十二年六月に設置した「気仙沼市小さな大使館」である。再開発ビル内の地域交流センターの中にあり、運営は一般市民から募集したサポートボランティアが当たる。主に市内在住の外国人のために、相談業務(月一回)、行政情報の提供(随時)、日本語教室(月二回)、各種交流事業を実施している。市内の音楽グループによる在住外国人のためのコンサートも開いている。

具体的施策・活動

- ・米国シアトル市へ中学生派遣
- ・インドネシアからの漁業研修生受け入れ
- ・中国・舟山市からの水産加工技術研修生受け入れ
- ・小さな国際大使館運営事業



大使館ニュースの作成

埼玉県東松山市

比企丘陵を縫うスリーデーマーチ



穴・森林公園ルート、都幾川・千年谷公園ルートなど、東松山市を中心とする豊かな自然に囲まれた比企丘陵地域を開催地域としている。

大会運営はすべて市民によるボランティアで行われ、東松山市国際交流協会や地元住民が語学ボランティアやホームステイ受け入れなどに協力し、市民による草の根レベルの国際交流が行われている。また、地元商店街では期間中、ナイトバザールを開催し、中央会場の特設テントでは地場名産の販売を行うなど、経済効果も大きい。

発祥の地・オランダとの交流

ウオーキング大会発祥の地であり、

世界最大の大会「日本スリーデーマーチ」を昭和五十五年から開催している。当初は五千人程度の参加者だったが、二十年を重ねるうちに大きく成長し、第二十二回大会では海外二十カ国百四十八人を含め、八万人以上が参加する世界第二の規模となった。

コース設定は、地域の特色を十分に生かしたものとなっている。すなわち、和紙の里・武蔵嵐山ルート、吉見百

世界最大の大会「インターナショナル・フォーデーズ・マーチ」の開催地であるオランダ・ナイメーヘン市とは、昭和五十六年から国際交流を重ね、平成八年には姉妹都市提携の調印をした。

具体的施策・活動

・日本スリーデーマーチの開催
・オランダ・ナイメーヘン市「インターナショナル・フォーデーズ・マーチ」への市民訪問

山口県下関市

インターネットで国際交流



この締結式の様子はインターネットを利用して下関市の中学校に同時中継され、多くの中学生が式典参加の仮想同時体験をすることになり、その後、インターネットを利用した学校間の交流が始まっている。

東アジア都市会議でも活用

九一年に発足した東アジア（環黄海）都市会議は現在十都市で構成されている。九八年に中国・大連市で開催された会議で、下関市長からインターネットの活用を提案し、これを受けてインターネットホットラインが構築された。これによって、日中韓三カ国語が同時に使用されるメーリングリストなどが、各都市間で情報交換や情報の共有化などに活用されている。

姉妹提携先を探す

トルコ伝統芸能団「ラベル」下関公演

下関市の姉妹都市提携先は当初、四都市だったが、市民や議会から英語圏の姉妹都市を求める声を持ち上がり、市民レベルでの多様な交流が活性化することを条件に相手都市を探した。このとき活用したのがインターネットで、米国ピッツバーグ市が有力候補となり、さらにEメールでの連絡・情報交換、相互訪問を経て、一九九八年にピッツバーグ市で姉妹都市提携を締結した。

具体的施策・活動

・米国ピッツバーグ市との姉妹都市締結
・トルコ伝統舞踊芸能団の下関公演

ラフカディオ・ハーンをめち

日本語日本文化講座

松江市はラフカディオ・ハーンとの縁で米国ニューオーリンズ市やアイルランド・ダブリン市との友好交流を深めているが、さらに国際交流が多様化していくことから、平成八年に松江市国際交流協会が設立された。

協会の主な事業のうち、「松江日本語日本文化夏季講座」は、フランス語圏と松江市と友好関係にある都市からの受講生を対象に、日本と松江市への理解を深めてもらうために、日本語講座、日本文化講座、市民交流会、ホームステイを行っている。

市民とふれあい事業

また、市民交流事業として、「異文化理解講座」ではアジアからの留学生による手作りの料理などを通して固有の文化への理解を図り、「国際交流のひろば」では、市が招へいしている

国際交流員が交流イベントを自主的に企画・実施し、母国の文化を紹介している。

このほかにも、ボランティアによる「外国人のための松江日本語講座」、留学生に市の施設を視察してもらう「留学生視察研修交流事業」、家族がいる留学生のための「留学生宿舎提供事業」を実施している。さらに、友好都市である中国・吉林市、韓国・晋州市へ市民を派遣して交流を深めている。

具体的施策・活動

- ・日本語日本文化夏季講座
- ・異文化理解講座
- ・留学生のための日本語講座



外国人のための松江日本語講座



松江日本語日本文化夏季講座

外国語指導助手を歓迎

「青い目の人形」の贈り主探し

徳島県下で唯一存在する日米友好親善人形（通称「青い目の人形」）の贈り主探しを平成二年に実施し、贈り主を探し出すことに成功した。翌年、米国ペンシルバニア州ウィルキンスバーグ市に、小中高校生代表らと里帰りさせた。この盛り上がり組織的・継続的なものにしようと、平成四年に神山町国際交流協会を設立した。

その後、平成五年から、県内に配属されているALT（外国語指導助手）研修会を開催しているが、町内でのホームステイはALTから「神山ウィークエンド」と好評を博している。

平成九年に「アドプト・ア・ハイウェイ」（道路清掃養子縁組み制度）を全国に先駆けて町内の国・県道の清掃活動に導入。県が神山町を含めた地域で計画している「国際文化村構想」にふさわしい品格のある町を目指している。

芸術家を招へい

平成十一年度から「アーティスト・イン・レジデンス」

招へい芸術家の故郷料理を共につくり食を通して交流



事業として、外国人芸術家などを招き、三小学校の空き教室を使って、創作活動のかたわら、子供や町民との交流をしてもらっている。

平成十二年には、徳島市内で開催された国際ポスター展に出品されていた二十一国の作家が制作したポスター六十点を譲り受け、神山温泉の周辺に展示板を設置し、常設展示している。

具体的施策・活動

- ・ALT研修会の共催
- ・「アーティスト・イン・レジデンス」事業

アジア・太平洋環境女性会議場のロビー風景



福岡県北九州市 財アジア女性交流・研究フォーラム 地域を忘れず、グローバルな視点で

アジア女性会議やセミナー

一九八九年に北九州市のふるさと創生事業に「アジアの女性の研究・研修システム」が選ばれ、これをきっかけに翌年、設立された。全国へ、そしてアジアを中心とした海外へと、活動の広がりを目指しているが、常に地域の中での活動の浸透を忘れずにいる。

「アジア女性会議―北九州」を開催、また多くの市民にアジアへの理解を深めてもらうために「アジアセミナー」を開催している。

海外事情知らせる通信員レポート

さらにJICAからの委託を受けて「女性の地位向上のための行政官セミナー」や「環境と開発と女性セミナー」を開催。市立女性センターからの委託を受けて「女性起業家支援塾」を開いたり、サンフランシスコの女性起業家の活動を視察する「スタディツアー」も実施している。

このほか、海外に通信員を置いて最新の女性問題の情報を市民に知らせる「海外通信員レポート」を発行したり、国際協力の分野で働くことを希望する人たちに「国際協力カレッジ」を開催。また、子供たちの国際協力を進めるための「国際理解教材ビデオ」を制作、販売している。

- ・「アジア女性研究」発行
- ・「アジア女性会議―北九州」開催
- ・「アジアセミナー」開催

宮崎県延岡市 インド国際子ども村「ハッピーバリー」 インドを拠点に平和キャンプ

延べ三百人が参加

「世界中の子供たちが集まって平和が語れる国際子ども村をつくろう」

と、一九九二年にインドに活動拠点「ハッピーバリー」を設立した（事務局は延岡市内）。

以来、毎年「平和キャンプ」を実施している。キャンプにはこれまでに延べ三百人（日本からの子供も含む）が参加している。



平和キャンプ以外にも、スリランカやインドから日本へ子供たちを招き、学校訪問やホームステイで親睦を図っている。九八年からはインドの恵まれない少年たちの職業訓練施設の支援事業も行っている。地域住民も活動に大きな関心を寄せ、バザーや寄付活動に積極的に協力している。

知り合った子らの友情の輪

活動を通じて知り合った子供たちは、それぞれの国を訪問し合うようになり、

民間レベルでの国際交流に発展している。また、活動に参加した子供たちが、各種の弁論大会で活動したり、登校不適合の子供や高校中退の子供らが、活動を通じて自分の進路を決め、さまざまな分野で活動を開始した例もある。

欧米を中心とした交流が多い中で、インドの子供らとの交流を図るのは非常に珍しく、地域の国際化や子供たちの心を育てる面からも注目されている。

- ・ハッピーバリー設立
- ・職業訓練校への支援

21世紀はNPOの時代!?

いよいよ二十一世紀が始まった。

二十一世紀はどんな時代になるのだろうか。

あるいは、どんな時代にしなければならないか。

二十一世紀が始まったからといって、二十世紀の問題がオール・クリアになるわけではない。

むしろ事態は逆で、二十世紀の問題を引きずりながら、二十世紀が残した課題を片づけるところから、二十一世紀はスタートしなければならない。

たとえば六百四十五兆円に及ぶ国、地方の借金をどうするのか。たとえばグローバル経済に伴う企業の倒産、失業の問題をどうするのか。

乱暴さを覚悟のうえで、エイヤツで言ってしまうと、二十世紀、その末期には、大方が頼りにしていた政府も会社（市場）も、アテにならなくなってしまった。国に尽くしていれば、会社に忠誠を誓えば、一生、老後まで

面倒みてくれるという幻想のメッキがはげた

時代、それが二十世紀、とくにその末期といえまいか。

セーフティネットとしての政府も企業も、そのほころびが無視できないほど大きくなった。

そこでどうするか。

そこで、熱い期待、視線を集めるのがNPOというわけだ。

むずかしい言い方をすると、こういうことになる。

十九世紀、アダム・スミスが唱える「夜警国家」の時代には、政府の役割は軍隊、警察など治安維持だけ。あとはマーケット（市場）にまかせておけ、という「市場万能」の時代だった。

ところが、資本主義が進展し、寡占^{カセ}、独占資本主義の段階に至ると、「市場の失敗」が顕在化してくる。国内における貧富の拡大、国際的な帝国主義、植民地化といった問題だ。

そこで二つの方策がとられる。

一つは「市場」を否定して、すべての財、サービスは「政府」が提供するという社会主義国家。これは「政府」の非効率、腐敗、汚職で一九九一年にソ連が消滅した。

もう一つは「福祉国家」。「市場」を残しながらも資本主義に修正を加え、政府の役割を拡大しようという考え方。これも社会主義ほどではないが、大きくなった分だけ、「政府の失敗」が目立ち始めた。

そこで二十一世紀はNPOの時代。NPOが一定の存在感を示すことで、「市場の失敗」「政府の失敗」を小さくする社会をつくろうという試みだ。福祉でも、環境でも、まちづくりでも、「政府」（第一セクター）、「市場」（第二セクター）に次ぐ第三のセクター「NPO」が一定の存在感を持つことによって、「より安いコストでより良いサービス」を提供する社会をつくろうとする試みは、チャレンジしてみる価値のある社会実験といっているだろう。



4 山口県下関市

トルコの姉妹都市からやってきたトルコ伝統芸能団の公演



5 熊本県芦北町

「フィリピン森づくり」に向けた子供たちによる苗木づくり



〈民間国際交流団体部門〉1 徳島県神山町：神山町国際交流協会
外国人芸術家が創作活動のかたわら児童に課外授業をしてくれる



2 島根県松江市：財松江市国際交流協会

インドからの留学生がお国料理を市民に紹介する異文化理解講座



世界に開かれたまち

〈地方公共団体部門〉1 岩手県藤沢町

オーストラリアの姉妹都市訪問先で藤沢町の中学生らが神楽を披露



2 宮城県気仙沼市

「気仙沼市小さな大使館」では日本語教室も開いている



3 埼玉県東松山市

(上)日本スリーデーマーチには海外からの参加者も多い

(下)オランダの姉妹都市のフォーデスマーチに参加した東松山市民



地域づくり団体

1 北海道倶知安町：くっちゃん未来21雪だるまの会

東京・銀座で毎年8月に作り上げる高さ4mの雪だるま



2 北海道上湧別町・遠軽町・丸瀬布町・白滝村：湧別原野オホーツク100kmクロスカントリースキー大会実行委員会

日本一距離の長いクロスカントリースキーの参加者は3000人を超える



3 秋田県角館町：角館企画集団トライアングル

上大正時代の女学生スタイルの記念撮影は観光客に人気
下夜の武家屋敷を活用して講演会を開催



3 福岡県北九州市：財アジア女性交流・研究フォーラム

「アジア」と「女性」をキーワードにいろいろな会議を開催している



4 宮崎県延岡市：インド国際子ども村ハッピーバリー

インドから招いた子供たちと高校生との交流会



個性的で活力のある広域行政圏

1 宮城県 仙南地域広域市町村圏

愛称が「AZ9」（アズナイン）の仙南では、イベントも盛ん



2 長野県 飯伊地域広域市町村圏

飯伊の広域イベント「いいだ・しもないフェスティバル」



7 長野県須坂市：信州須坂町並みの会
平成元年からの「町並みフェスト」の一コマ「お蔵拝見」



8 京都府舞鶴市：まいづる肉じゃがまつり実行委員会
呉市とテレビ番組で「肉じゃが発祥の地」をかけて対決!



9 奈良県五條市：新町塾
町並み環境整備で薄茶色の舗装に変わった路面



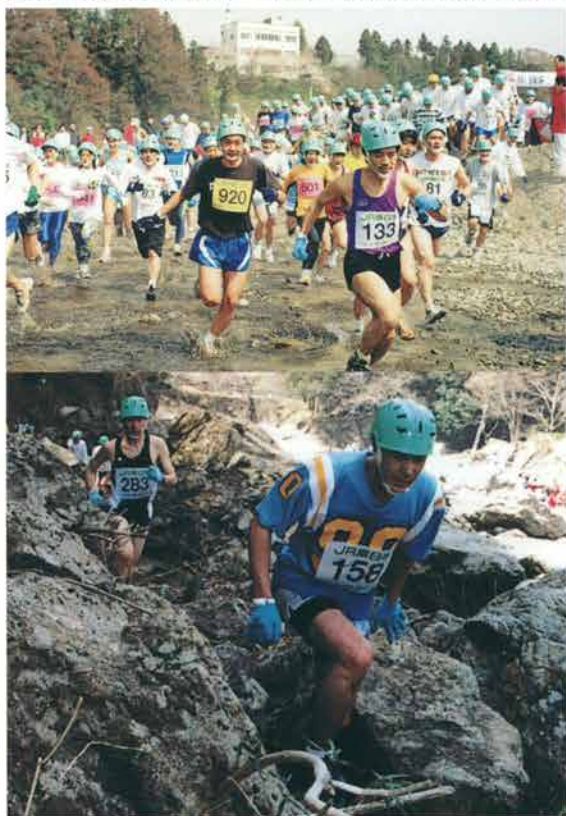
10 徳島県徳島市：新町川を守る会
ボートを繰り出して行う新町川の清掃は活動の原点



4 福島県鮫川村：夢楽会議21
自然環境保護の意識を高める親子自然観察会



5 東京都あきる野市：秋川溪谷自然人レース実行委員会
秋川溪谷の川や岩場を走るレースには見物人を含め5000人が参加する



6 福井県丸岡町：丸岡五徳会
丸岡文化少年団の創立1周年記念の植樹



2 神奈川県大和市

市内の全小中学校ではインターネットで学習ができる



3 長野県塩尻市

高度情報通信社会を体感できる情報プラザの体験ギャラリー



4 京都府園部町

CATV施設がある園部国際交流会館(左の天守閣)とマルチメディアセンター右



5 島根県赤来町

職員3人のミニ放送センターだが、住民ニーズに合った情報提供がモットー



11 愛媛県双海町:夕焼けプラットフォームコンサート運営委員会

プラットフォームコンサートの登竜門でもある夕焼け音楽祭



12 高知県赤岡町:土佐絵金歌舞伎伝承会

「絵金まつり」で歌舞伎を上演する伝承会



13 長崎県郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町:杵岐サイクルフェスティバル実行委員会

杵岐島内を巡って競われるサイクルロードレース



優良情報化団体

1 群馬県佐波郡東村

村の文化祭で体育館に設けられたインターネット体験コーナー



織田匡子（おはたまさこ）



NPOふれあい独楽代表

私たちの「独楽の会」は昭和五十五年、寝

屋川市に誕生、下は三歳から上は八十四歳までの歌好き仲間老若男女の集まりです。当時は「生涯学習」という言葉が流行り始め、「独楽は回っている間は倒れない」と、文部省唱歌の「もみじ」の歌詞ではありませんが、波にゆられて離れて寄って、赤や黄色の色さまざまに、水の上にも織る錦の言葉通り、みんなが集まって来ては、イベントやコンサートを通じて地域での仲間づくりを続けてきました。

母体は児童合唱・ママさんコーラス・高齢者コーラスの三世代から成り、それぞれのグループが活動していますが、コーラス以外の分野で、俳画や水墨画のグループ、手芸や木彫のグループなど、個人個人が趣味や特技を生かして自転しているわけです。

などと述べますと、何だか大変立派な団体の感じがしますが、もっとわかりやすく言えば「何かおもしろいコトセーへん!?」「この指と

まれ!!」型の「現代版井戸端会議」。

「だれが生徒か先生か」（めだかの学校）、「教えられたり教えたり」（隣組のうた）の大変よい・加減な平和なグループだと自負しています。平成七年一月十七日の阪神・淡路大震災で、神戸の皆さんが「上を向いて歩こう」の歌で立ち上がられたときに、私たちも自分たちが楽しむだけではなくて、もっと社会に還元しようではないかという機運が高まり、平成八年四月に独楽の会を母体としてメセナボランティアGROUP「ふれあい独楽」が誕生しました。

メセナとはフランス語で文化・情報を支援するという意味だそうで、私たちはこの情報という文字を「情に報いる」と訳しています。以来五年間、二百数十人の会員は、個人のカルチャーも楽しみながら、バザーや手作り作品の販売などで資金を集め、地域の老人保健施設や特別養護老人ホームなどへ「歌の出前」に出かけたり、各地の困っている人びと

へ働きかけるなど、無理をせず、ゆったりとボランティア活動が続けています。

活動の一環としては寝屋川市と共催でエコロジーを考えた「護美isハッピー展」や障害を持つ人と持たない人のバリアフリーコンサート「そうる（魂）ミュージックライブ」など、新しく迎えた二十一世紀に羽ばたこう!!

そして自分を役立てようと、それぞれがそれぞれの色で自由に回っています。世代間交流を目的とした野外コンサートでは、保育園・幼稚園・小学校通いの子供たちが近所の高齢者や年長者と握手をしたり、フォークダンスをしたりして交流する姿は、ほんとうにほのぼのと心温まる気がします。

二十一世紀はこころの時代！ 私たち独楽はこれからも音楽その他の交流を媒体にして、皆で仲よく元気に回り続けたいと願っています。

「青春とは心の若さである」そうですから…。

独

二十一世紀に回る独楽

楽

児童劇団を結成し、圏民が後押し

宮城県 仙南地域広域行政事務組合

仙南地域広域市町村圏は、宮城県南部の二市七町で構成され、人口は約十九万七千人の圏域である。

当圏域は、歴史的に刈田・柴田・伊具の三つの生活圏に分かれ、その意識が根強く残っており、これを解消するためには、「圏域は一つ」という理念が必要であった。

このため、平成二年度に策定した「第三次広域市町村圏計画」では、本圏域が阿武隈川流域に属することから、この流域に住む人びとが祖先から伝えられた共通の生活様式を掘り起こし、再発見しながら、それを土台として新しい文化を創造しようという「阿武隈流域文化圏構想」を打ち出した。

圏域の愛称はAZ9(アズナイン)

平成三年度には「ふるさと市町村圏」に選定され、これを契機としてソフト事業を実施するに当たり、住民主

導による事業を展開するために「住民協議会」を設置し、この中で本圏域を「AZ9(アズナイン)」という愛称で表現することとした。圏域のシンボルである阿武隈川の「A」、蔵王の「Z」、構成市町の数である「9」を表すとともに、AからZ、1から9まで、つまり初めから終わりまで九市町が協力して推進するという意味も込められてお

り、ソフト事業全体を「AZ9プロジェクト」として展開することとした。プロジェクトの基本方針は二十一世紀に向けて流域を一つの文化圏に育て上げることを目標とし、圏域の将来を担う子供たちの参加に重点を置いた。

代表的な事業は、本格的な児童劇団の養成を図る「ジュニア・アクターズ」、川を舞台として自然環境を学ぶ「川学校」などであるが、事業を住民主導で行ったことが大きな特徴である。そして、圏域住民と行政の連携によって、「仙南は一つ」という意識が着実に芽生えてきた。

九市町で出資した十億円の基金の果実は、利率の低下で少なくなり、AZ9プロジェクトは「ジュニア・アクターズ」のみになったが、その他の事業は構成市町の実行委員会に受け継がれ、定着している。

最終の目標は、圏域住民が自治体の枠を超えて交流し、自ら考え、自ら行動して、環境を守り、文化を創造していくことが、个性的で活力のある圏域をつくることになるという原点を、常に行政が認識し、バックアップしていくことが何よりも大切であると考えている。



組合理事長・白石市長

川井 貞一



AZ9ジュニア・アクターズ公演

●成功のポイント

「失敗を恐れず、冒険が必要だ」「予算のばらまきでは意味がない」と住民側。

一方、「行政に失敗は許されない」「基金を出資したのだから、わが市、町に金を還元してほしい」と行政側。

あくまでも広域圏全体を考える住民側と、自分の市、町の利益を主張する行政側との間には大きなギャップがあったが、最終的に住民の意見を尊重してスタートした「AZ9プロジェクト」。

立案した事業は、当時としては前例がないものばかりであり、事務局としては不安だらけの船出であった。住民の知恵と力が結集した結果、失敗どころか、大成功を収めることができた。圏域住民のパワーに敬服するばかりである。

今回の自治大臣表彰は、このように圏域住民が自主的・主体的に事業に取り組んだことが高く評価され、受賞したものである。圏域住民に心から拍手を贈りたい。

そして、21世紀の仙南圏域は、全国に誇れる圏域になると確信するものである。

●仙南地域広域行政事務組合企画調整課

多くのハード・ソフト事業を推進

長野県 南信州広域連合

飯伊地域広域市町村圏は、長野県の最南端に位置し、南アルプスと中央アルプスに挟まれ、千九百二十九平方キロと広大な地域のうち約八五%を山林が占める中山間地域で、一市三町十四村で構成される人口約十八万人の圏域である。

当圏域は「住む人も訪れる人も心安らぐ日本のふるさと・ふるさと南信州交流文化圏の創造」を基本理念に掲げ、「人材育成」「地域間交流」「教育文化活動」を主要施策にして、次のようなハード・ソフト事業を進めている。

若者定着、人材育成に力点置く

まず、この伊那谷は民俗芸能の宝庫として知られることから、伝統芸能文化振興事業として、三百年の歴史がある人形浄瑠璃の保存・伝承の拠点とすることを旨とし、技術・研修の場と浄瑠璃人形を保存するための地域伝統芸



連合長・飯田市長
田中秀典



能交流館を整備した。さらに、国・県指定の十五の伝統芸能団体をはじめ、積極的に伝統芸能の承継保存を行っている団体を支援している。

また、地域に若者を定着させ、地域の活性化を図るために、中学校・高校生を対象に、地域の誇りと認識を深めてもらう進路指導書を、飯田市、町村会などが中心となった発刊委員会で作成し、授業で活用している。就職出版社が開催するU・J・インターンフェア

ーにも参加し、飯伊地域の紹介を通じてU・J・インターン者を受け入れ、人口の増加、地域の活性化に努めている。

圏域外への地域のPRでは、ふるさと通信事業として、中京地域向けのラジオで「好きです南信州」という番組を放送し、観光・イベント情報を発信して観光客の誘致を図っている。

ふるさとづくりの担い手として積極的に行動できる人材を育成するため、海外研修視察を行っている。視察を通じて創造性を培い、国際的な連帯感と協調の精神を育て、時代の変化に的確に対応できる活力あふれた人材を育成

するものである。

広域的なイベントでは、飯田下伊那地域が一体となった「いいだ・しものなフェスティバル」を実施している。各市町村の特産品販売、伝統芸能公演などによって、地域住民がふるさととの再発見をするともに、広く飯伊地域の良さを情報発信している。

このほか、飯田下伊那地域の自然を生かしたアウトドアスポーツを圏外の人たちに満喫してもらおうと、各市町村がキャンプ、パラグライダー、星空教室などを開催し、飯伊のイメージアップを図っている。

●成功のポイント

巻 域には18の市町村があり、各種の実行委員会では事業の実施に当たっては、各市町村の担当者に共通の目標に向かって積極的に任務を遂行してもらっている。

たとえば2日間にわたって開催する「いいだ・しものなフェスティバル」の場合、3つの催事実施グループに分け、それぞれに各市町村・団体の職員を張り付け、準備の段階から個々の役割分担を決める。これらの職員は企画・立案から実行まで、責任をもって当たることになる。

事務局は大枠だけを決め、詳細は各催事のグループで判断し、実行してもらっていることが、大きなイベントを実施し、それを成功させている要因かと思われる。

どんな事業についても18市町村の担当者が、共通のテーマとして取り組むのである。「地域が一体となる」という初心に帰って、地域全体のメリットのために、地域全体でいかに住み良い地域社会を経営していくかという視点に立って、一丸となって課題解決に向かって努力していることが、多くの事業を成功させてきたように思う。これによって、連帯感も生まれているのである。

●南信州広域連合企画振興係

「肉じゃがが発祥地」宣言でまちおこし

京都府舞鶴市 まいづる肉じゃがまつり実行委員会

「暗い暗いと不平を言うよりも、進んで明かりをつけよう」と、J・C卒業者の仲間や市の職員、会社員、自衛隊員らとまちづくりグループを形成していたころの十年前。海上自衛隊舞鶴地方総監部第四術科学学校給養科の日浦直史教官の講演で「肉じゃがは旧海軍にルーツがある」と聞き、「食文化によるまちおこし」をやろうと、研究・調査を始めた。

ユーモラスさて

世相吹き飛ばす

まず、「肉じゃがはどこから来たのか」と、日浦教官に全国の自衛隊基地の調査を依頼し、地元料理学校の先生には全国の先生方に「肉じゃがの発祥地は」と、問いかねをお願いした。

私自身も市役所や図書館などに通い、徹底的に調査したところ、「NHKふるさとデータベース」の舞鶴市の紹介欄に「肉じゃがの発祥地」と記された一



実行委員会代表
清水孝夫

行を発見した。「してやったり」と気よく、京都、大阪、東京の放送局に「どこから取材したか」を問い合わせたが、取材先はわからなかった。

それでも、「発祥地」と記された証拠品は出てきたことになる。また、海上自衛隊第四術科学学校の図書室から「海軍厨業管理教科書」が見つかり、肉じゃがの原型たる牛肉とじゃがいもの「甘煮」が記載され、セピア色に色あせた教本も出てきた。

こうして調査完了までには長い年月がかかったが、平成七年十月、この年の阪神・淡路大震災などの暗いニュースを吹き飛ばし、明るくユニークでユーモラスなまちおこしをしようと、「肉じゃがが発祥地宣言」を舞鶴から世界に発信したのである。そして、各種あつたまちづくりの団体に呼びかけ、賛同者を三十人ほど集め、「肉じゃがが発祥地」としての活動を始めた。会員には東郷平八郎元帥の真つ赤なロゴ入りのエプロンと、錨のマーク付きの紙帽子。リーダーは東郷さんの大礼服姿のコスチューム。さらに「まいづる肉じゃがが発祥地」と大書した「のほり」などを用意した。

●成功のポイント

日本古来から「肉じゃが」はあったのかと、私自身も疑問を持ったことがある。

最近、小学館の文庫本で「おふくろの味」評論家である三本章さんの新刊を読んでも、私たち以上に「肉じゃが」にこだわり、造詣が深い。

氏によると、「肉じゃが」と言われ出した時期は昭和48年ごろから50年ぐらいだという。その歴史は新しい。

舞鶴と呉との肉じゃがバトルにも触れているが、舞鶴びいきで、さすがにお目が高い。じゃがいものルーツにしても、随分克明に調べられている。

私たちの活動を高めてくれた早道は、何と言ってもマスメディアにほかならない。全国ネットのテレビ番組や中央紙、地方紙、週刊誌、ラジオインタビューなど、バトル時代に乗って、たびたび取り上げてもらっている。こうしたマスコミ効果がもたらした結果と感謝したい。ただし、私は自分たちならではの演出もプロデューサーに理解してもらって取り入れていただいている。やらせてはない、新鮮味のあるまちづくりの演出として。

●実行委代表

東郷さんが出てくるのにはわけがある。「肉じゃがは今から百年前の明治三十四年、舞鶴海軍鎮守府の初代司令長官であった東郷平八郎中将が、青年期の英国留学中に食べたビーフシチューが忘れられず、兵隊たちの脚気防止にはこの栄養価の高い洋食こそと思いつき、料理士官に命じて作らせた。だが、日本の調味料は砂糖、醤油、ごま油の類しかなく、甘煮、すなわち肉じゃがとなった。だから、東郷元帥が肉じゃがを舞鶴で初めて作った」——こういうストーリーをつくり上げたのである。

こうして、市民自らの真に「手づくり



訪英し、ポーツマス市長と市ホールにて(1998年8月)

のまちづくり」を始めた。当初、一部の市民からは強い反対があったが、「物語をつくり上げるにはいろいろとクレームもつくものだ。舞鶴の歴史に恥じない、ユニークなまちづくりを必ずやってみせる」と豪語して進めてきた。

さて、発祥の地宣言は、前述したように平成七年、市主催の「赤れんがフェスタin舞鶴95」の十月十四、十五日、グルメコーナーにマスコミを集め、面白・おかしく発表した。

私たちの活動も、市内小学校や保育園の給食に肉じゃが献立をお願いし、居酒屋さんや食堂にはメニューに入れてもらうようお願いしたり、のほりを毎日掲げてもらったりと、いろいろな方法で街に活気を広げていった。また、観光協会には東京以西のJR主要駅に千二百枚の大型ポスターを掲示してもらい、行政サイドにも支援を求めた。

現在までのイベント数は、マスコミのPR効果もあって、少ない年で十回、多い年では二十五回ほどの活動を積極的に展開している。

一度に二百人分と七百人人分の肉じゃがが炊ける二つの大鍋は、海上自衛隊と舞鶴市から無償で借用しており、これも大きな支援と感謝している。

平成十年五月、舞鶴市は英国ポーツマス市と姉妹都市を締結した。実行委

員会では三十人が自費訪英し、現地では市民が「東郷さんの肉じゃがが里帰り」と大歓迎。二百人のポーツマス市民と、肉じゃが、ビーフシチューで交流を図り、市長と海軍の料理長さんから訪問の証明書をいただいた。

旧軍港都市との交流

その秋の十一月、呉市の「食の祭典」に友情出演するため、マイクロバスのボディに「元祖舞鶴の肉じゃがが殴り込み大作戦」と大書した幕を張り、山陽道を走った。実は、呉市にも東郷さんが赴任したことがあり、呉市から「肉じゃがの本家はウチじゃが!」と前年



第1回旧軍港4市グルメ市民交流会(1999年10月)

にチャレンジを受け、「ちよつと待て!」ということで、多くのマスコミが待ちかまえる呉市に乗り込んだのだ。われわれは、イベントはもちろんのこと、すべての手順をつくった本流であり、この肉じゃが合戦では大きな差をつけたと思っている。これも毎年、東京・原宿の東郷神社に参拝しているおかげかもしれない。

現在は、舞鶴市内の食堂、飲食店などの中から、肉じゃがを食べさせるお店をたくさん募りたいと、普及運動に精を出しているが、関連のグッズを作ったPR効果を高め、利益にもつながるようなものも欲しい。そんなとき、京都市の龍谷大学の学生たちが夏期フィールド調査入門として「肉じゃが舞鶴市のまちづくり・まちおこし」を企画し、ヒアリングに應對した私が「君たち若い人が望む土産品とは」と尋ねたところ、異口同音に「手に持って食べ歩きができる、その土地ならではの商品」という答えが返ってきた。

そこで、ある食品加工メーカーに開発をお願いした。メーカー側もまちづくり協力商品の開発は初めてのことであったが、当方の願いをよく理解していただき、出来上がった商品は「じゃがりこ肉じゃが味」というスナック菓子。舞鶴地域限定商品として、十一年十月

一日から四カ月の期間限定で発売したが、追加生産までしてもらったのに一カ月半で完売。一年後、今度は前年の二倍以上の数量を販売したが、また二カ月余りで完売してしまった。

十二年九月末、天皇皇后両陛下が当地を巡行されたとき、案内役の京都府知事と舞鶴市長らが舞鶴の歴史と産物を説明する中でこのお菓子を話ししたところ、お買い上げになり、関係者一同、深く感激したところである。

ところで、十一年十月には旧海軍軍港があった横須賀、呉、佐世保に呼びかけ、舞鶴で四都市のグルメ交流会を開催した。横須賀市はカレーライス発祥地、呉市は当市と同じ肉じゃが発祥地、佐世保市はハンバーガー発祥地である。この集いは翌年には横須賀市で開催され、このとき提案された四市共同の食品開発の研究を進めている。さらに、じゃがいもの産地である北海道にも参加してもらいたいと考えている。

このように全国的に広範囲に交流し、結び合う。そのことがまちづくりの面白さを広げ、地域の連帯感や絆が生まれるだろう。まちづくりとは「人との出会い。自らの活動。ねたまず、周囲の協力があってこそ達成できるもの」と思い、私の真情としている。

(平成七年六月設立、五十二人)

真夏の東京・銀座に巨大雪だるま

設立の経緯

全国でも有数の豪雪地帯で、「スキーの町」宣言をしている倶知安町を全国的にPRできないものかという発想で、さまざまな団体の協力を得ながら、平成二年に知恵を出し合って発足した。

だわりや雪への思い入れによって、自分たちの町が誇れる「天からの恵み」へと、徐々に住民の心に根付いている。試行錯誤を繰り返した雪の貯蔵方法は、道外の市町村から問い合わせもあり、町では雪を利用した産業振興も考えている。

具体的活動

- ・真夏の東京・銀座雪だるま
- ・福祉施設との交流
- ・ペルーとの交流

(平成二年五月設立、約八百人)

発足の年の八月、真夏の東京・銀座の数寄屋橋公園で、高さ四層の巨大雪だるまを製作した。以後、毎年継続して実施している。雪だるまは会員約五十人が徹夜で製作しているが、真夏の銀座に出現する雪だるまは銀座を歩く人びとの度肝を抜き、今では風物詩としてすっかり定着した。

平成七年から、養護施設や福祉施設の子供たちに、現地でミニ雪だるまや滑り台を製作し、雪遊びや特産品のジャガイモなどを使った料理で昼食会を行っている。

銀座の雪だるまを知ったペルー共和国駐日大使の声掛かりで、ジャガイモの原産地である同国タルマ市との交流が始まり、駐日大使を招待したり、タルマ市を訪問したりしている。

成果

「やっかいもの」だった雪が、雪へのこ

養護施設や福祉施設での昼食会



北海道湧別町・遠軽町・丸瀬布町・白滝村 湧別原野オホーツク100kmクロスカントリースキー大会実行委員会 日本一のウロスカントリースキー

設立の経緯

雪と流水に閉ざされるオホーツク圏の厳しい冬は、地元でもマイナスイメージしかなかったが、上湧別町の若者たちがこの地域特性を生かしたイベントを生み出したいと語り合い、冬のスポーツイベントが不足していることに着目し、企画した。湧別川流域をコースとするため、四町村が行政の枠を破って取り組むこととし、発足した。

主な活動

国内では一番距離が長いクロスカントリー大会で、スキー駅伝など競技種目も多い。昭和六十一年の第一回大会は参加者が七百八十人だったが、近年は三千人を超える国内有数の大会に成長した。

子供からお年寄りまで幅広く参加できる。大会の運営には、地域の一般住民や中学生・高校生が多数ボランティアとして活躍している。

成果

地元の若者グループが地域おこしの一環として始めたが、心のふれあいの場、出会いの場として成長し、マイナスイメージだった北国の冬を地域の特



夏のおオホーツクフィッシング大会

性として前向きにとらえるようになった。また、町村の枠を超えた取り組みの成功から、夏のおオホーツクフィッシング大会などが生まれてきた。

具体的活動

- クロスカントリースキー大会
- ・湧別原野コース
- ・スキー駅伝
- ・町村コース
- ・大会前夜の交歓会

(昭和六十年七月設立、三十八人)

武家屋敷の観光客を商人町へ誘導

設立の経緯

ふるさと創生事業を契機として町が設置したまちづくりのワーキンググループが母体となって、民間ベースのまちづくり研究会に生まれ変わった。トライアングルという名称は、民間と行政のパイプ役を担っていく思いから名付けた。

主な活動

角館町は武家屋敷の並ぶ内町と商人町の外町が区割りされ、「みちのくの小京都」として多くの観光客が訪れるが、



桜祭りに行われる雅楽の演奏会

観光客を商人町へいかに誘導するかが課題だった。そこで「観光客に楽しんでもらえる」活動をと、商家の座敷や蔵まで案内する「外町案内人」を設けたり、春と秋の観光シーズンには「人力車」を、冬には「馬そり」を走らせた。

また、現在は雅楽演奏会・行進、英語日本語劇の公演、周辺地域の地域づくりグループとの「秋田まるごと鍋合戦」などを展開している。

成果

商家の屋敷や蔵を案内する案内人は、その後、「角館歴史案内人組合」として結成され、角館の古い町並みとマッチして人気を博した人力車は、秋田新幹線の開業に合わせて、J R東日本により事業化された。また、町並み景観の保全に傾きがちだった町も、旧武家屋敷を買い取って、レトロ感覚の店舗に改装するなど、ソフト事業へと変化してきた。

具体的活動

- ・夜の武家屋敷の活用
- ・旅の思い出帳
- ・秋田まるごと鍋合戦

(平成四年四月設立、二十七人)

国蝶オオムラサキで地域づくり

自然の豊かな関係



鮫川流域交流会・源流編
～水がよければ人もいい 人がよければ水もいい～

行政区域の枠を超えて流域環境を考える鮫川流域交流会

設立の経緯

鮫川村が開設した「村づくりおもしろ講座」の受講生の中から、職業も年齢も異なる人たちが集まって結成した。会は「将来の子供たちに何を残せるか」をテーマにして、会員の自由な発想とアイデアで活動している。

主な活動

これまでに、環境、教育、地域づくりについて語り合う「若者交流会」、地域づくりの専門家を招いた「ふるさと

づくり講演会」、山里でとれる自然の物を素材とした「親子自然工作教室」、オカリナ奏者などによる「かがり火コンサート」などを実施した。

かつて鮫川村にも乱舞していたオオムラサキを素材とした「国蝶オオムラサキの里づくり」は、「動植物が生息できるときの昔ながらの山里を子孫の代まで残す」のが目的。エサとなるエノキを植林し、飼育舎を設置した。

成果

オオムラサキの里づくりに賛同する人たちが増え、マスコミにたびたび取り上げられることで、村民にも自信と誇りが芽生えている。県内組織として「オオムラサキネット21」が結成され、交流が拡大している。

また、鮫川流域の三市町村の地域づくり団体で「鮫川流域交流会」を開き、自然環境保全に対する意識の高揚と地域のイメージ向上に貢献している。

具体的活動

- ・エノキの植樹
- ・オオムラサキ観察会
- ・ふるさと春まつり

(平成三年四月設立、二十一人)

環境を体感する自然人レース



成果

既成のスポーツイベントではない新鮮さと、自然に溶け込みつつ自然の大切さを体感できることが共感を生み、北海道、九州からも参加があり、見物人も含めると五千人規模に成長した。

第四回からは、自然を愛し、大切にする啓蒙活動として、「ふるさとの川

設立の経緯

東京でありながら、過疎化の波が押し寄せている秋川流域の若者たちが、「地域の発展のために今なにが大切か」「川のために何ができるか」という問いかけから、自然に親しむ機会を持つと企画し、結成した。

主な活動

自然人レースは、秋川渓谷の河川敷内を、上流に向かって折り返し点までさかのぼっておりてくる往復のレース。川の横断や岩場登りがある約十キロの「精進コース」と、途中でのんびり川で遊べる「ファミリールコース」を設けている。

に、ふるさとの魚を」と、小中学校

や希望者にヤマメの卵の里親になってもらい、ふ化させた稚魚を育て、秋川に放流する活動も進めている。

平成八年度から長野県丸子町で自然人レースと趣旨を同じくする「爆水ライン依田川」が始まり、秋川実行委員会が特別協力として開催運営に協力しており、趣旨の広がりや連携が生まれている。

具体的活動

- ・秋川渓谷自然人レース
- ・ヤマメの放流
- ・コース内の河川清掃と水質調査

(平成元年一月設立、五十人)

小中高校生に詩のコンクール創設

設立の経緯

社会教育、文学、芸術音楽の分野で活躍していた人たちが、文化の基礎づくりを目標に設立した。古くから文化活動が盛んであった丸岡町において、草の根レベルで文化振興を図り、文化を媒体としたふるさとのまちづくりと人づくりに寄与している。

主な活動

丸岡町と縁が深い詩人・内田忠にちなんで、昭和五十二年に小中学生の詩のコンクール「創る賞」を開始した。

平成元年には中野重治没後十周年を記念して、高校生を対象に詩のコンクール「中野重治記念文学奨励賞」を創設。

その後、このコンクールは(奨)丸岡町文化振興事業団が引き継いでいるが、毎年三千編前後の作品が寄せられ、「詩の甲子園」として全国的に知られている。

平成九年には創立二十五周年

として、まちづくり講座「越前丸岡塾」

を開講し、「丸岡五徳会文化賞」を設定した。翌年創設した「丸岡文化少年団」は、文化を中心に小学生がさまざまな活動を行っている。

成果

詩のコンクールのほか、劇団「薨」や「ジュニアローレル児童合唱団」の創立・育成など、小中高校生らに文化に親しむ機会を設定し、他のコンクールでも受賞する生徒らを輩出している。

具体的活動

- ・小中学生詩のコンクール「創る賞」
- ・「丸岡文化少年団」の結成

(昭和四十七年十一月設立、六十三人)



小中学生詩のコンクール「創る賞」授賞式 丸岡文化少年団、いも版で年賀状づくり

町並みフェスの丸太切り大会



土蔵造りの町並みを保全

長野県須坂市 信州須坂町並みの会

設立の経緯

製糸業が繁栄していたころの土蔵造りの町屋がバブル全盛期に次々と取り壊され、近代的な建物が建ち並ぶリトル東京のような街になっていくのを憂いた有志たちが、賛同者を募って発足させた。

主な活動

毎月、勉強会を開くかわらわ、機関誌を発行し、平成元年から「町並みフェスト」を開催。平成三年からは町並

みに合った建物の建築主、施工者、設計者を表彰する「町並み景観賞」を設けた。

観光客を対象とした町並みガイドのボランティア事業や、機織り、絹糸染色などの地場産業おこしにも取り組んでいる。

成果

「蔵造りの町並み」が市民に認知されたことによって、「まちづくり協定」が十五地区で締結された。市も歴史的景観保存対策事業として修理・修景事業に対する補助金を創設したり、「まちづくり推進部」を設置するなど、町並み保全対策に乗り出すようになった。

市の「ミニ博物館設置事業補助金」の創設によって、ギャラリー兼休憩所や博物館兼休憩所ができています。

具体的活動

● 会員対象

● 例会（勉強会）、機関誌発行、先進地視察

● 市民対象

・ 町並みフェスト
・ 町並み景観賞

（昭和六十一年十一月設立、百八十人）

町並み生かしたフリーマーケット

奈良県五條市 新町塾

設立の経緯

自分たちの「まち」について考え、話し合う場を求めて、若者たちが結成した。旧紀州街道や伊勢街道の宿場町であった新町通りは、江戸時代に形成された日本で最も古い、規模の大きな町並みであることがわかり、郷土史家などを呼んで勉強会を重ねた。

主な活動

平成五年から新町通りの軒下で始めたフリーマーケットは、さながら江戸

成果

時代の「市」の再現で、その後、「かげろう座」と命名して、手作り品を中心とした木工品、ガラス細工、手芸品、リサイクル品が並び、古典芸能のパフォーマンスもあり、近ごろは音楽バンドのプロへの登竜門にもなっている。

成果

五條市や奈良県の援助を受けて、通りの街灯を塾がデザインしたものに交換したり、フェンスの塗り替えなどの修景や、木製郵便箱の原価販売を行うなど、地域イメージの醸成に貢献している。

こうした努力が評価され、平成八年度から市の都市計画策定に協力したり、建設省や文化庁の事業に計画段階から参画するようになった。

また、三重県、和歌山県の団体と県境を越えて交流会を開催するなど、地域間交流のリーダーにもなっている。

具体的活動

・ かげろう座
・ 団体交流（大和まちづくりネットワークとの情報交換など）

（平成二年四月設立、二十一人）

新町塾がデザインした木製郵便箱



川を浄化、水に親しむ活動広がる

設立の経緯

阿波踊り期間中のイベントとして新町川いかだレースを開催したところ、人が去った後の川の惨状に見かねて「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と結成し、月二回、ボート四隻で川の清掃を始めた。

主な活動

平成四年から川の無料遊覧「ひょうたん島遊覧船」の運航、八年から「吉野川フェスティバル」での各種イベント、市民五万人による「吉野川クリーンアップ作戦」に取り組み、十一年からは河川敷の里親となって清掃を行う「吉野川アドプトプログラム」にも取り組んでいる。

また、行政の依頼を受けて、「ひょうたん島ボートレース」「観月演奏会」「寒中水泳大会」などの環境啓発イベントも行っている。

成果

魚が住めないほど汚れていた新町川が、今では魚が戻り、人が泳げるまでに。ごみ捨て場になっていた田宮川の土手に花壇を作ったところ、だれもごみを捨てないようになつた。これらの河川清掃活動は、行政や企業の新人研修にも取り入れられている。

具体的活動

- ・新町川の清掃（月二回）
- ・遊覧船の運行（毎日）
- ・吉野川フェスティバル（年一回）
- ・ラブリバー・フェスティバル（ひょうたん島ボートレースなど）

ひょうたん島周遊船



ひょうたん島一周ボートレース



（平成二年三月設立、二百三十人）

無人駅で夕日コンサート

設立の経緯

昭和六十一年、伊予下灘駅の無人化が決定し、将来は廃線も懸念される中、地域住民と行政が一体となって、プラットホームをステージにし、瀬戸内海に沈む夕日をバックに音楽コンサートを開催しようとして結成した。

主な活動

町内の若者たちで寄付を募りながら開催した「夕焼けプラットホームコンサート」は、十五回を重ねる息の長い催しとなっている。

毎年、プロ歌手をはじめ、愛媛県内で活躍中のトップアマチュアバンドが出演し、今では二千人を動員するまでに成長している。

また、県内外のアマチュアミュージシャンが出場し、グランプリを獲得すると夕焼けコンサートに出演できる「FUTAMIミュージックフェスティバル」も開催している。

成果

双海町を代表するイベントとなり、JR四国の好意で、コンサートに合わせ「夕焼け特快列車」が運行されるようになった。

音楽を通して新しい若者文化が創出され、町の人たちに自分の町への愛着と誇りを芽生えさせた。このことが、国道378号の「夕焼けこやけライオン」の愛称命名につながり、町のキャッチフレーズ「沈む夕日が立ち止まる町」を生んでいる。

具体的活動

- ・夕焼けプラットホームコンサート（九月第一土曜日）
- ・FUTAMIミュージックフェスティバル（八月十四日）

（昭和六十一年四月設立、二十五人）

夕焼けプラットホームコンサート



高知県赤岡町 土佐絵金(えきん)歌舞伎伝承会

屏風絵の「歌舞伎」を上演

設立の経緯

赤岡町には幕末の絵師・弘瀬金蔵(通称「絵金」)が描いた芝居屏風絵のうち二十三点が保存され、年に一度の夏祭りの夜に商店の軒下に飾られる。これは「絵金まつり」として全国に知られているが、この屏風絵に描かれている歌舞伎の場面を自分たちで演じてみよう、商店街の主婦が発案し、有志が集まって結成した。

主な活動

毎年、「絵金まつり」の夜、二日間上演し、赤岡町の新たな文化として定着した。これまでに上演した演目は十一演目になり、平成十一年には国際親善協会が欧米で開催しているジャパンウィークに参加し、フランス公演を実現した。

成果

赤岡町の商店街は衰退の一途をたどっていたが、この歌舞伎活動がきっかけとなって、主婦たちの地元産品開発グループが生まれ、ミニ屏風などの絵金グッズを商品化し、商店街も「夜桜

絵金祭り上演の「三人吉三巴白浪(さんにんきちさとえのしらなみ)」



夜市」や「いごそう市場」を開催したり、絵金のポイントカードを始めた。町も、「絵金を核としたまちづくり」ワークショップを開くなど、商店街の活性化やまちづくりに取り組んでいる。

具体的活動

- ・絵金まつりの公演(七月)
- ・他地域との交流(広島県、愛媛県、山梨県の歌舞伎との交流など)
- (平成五年六月設立、五十七人)

長崎県郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町
壱岐サイクルフェスティバル実行委員会

島ぐるみでサイクルレース

設立の経緯

壱岐の振興のためには町ごとのイベントだけでは不十分と、有志たちが壱岐四町全体のサイクルロードレースを企画して結成した。

主な活動

開催は毎年六月。日本自転車競技連盟登録選手によるサイクルロードレースと、一般参加者のチャレンジロードから成る。全コースが公道使用のため、一時的な道路封鎖が必要で、警察、消防団や沿道住民の理解と協力が欠かせないが、参加者を気持ちよく迎えようと、地域住民総がかり

で島内一斉清掃などが行われている。

成果

リピーターを含め、多くの壱岐ファンを獲得し、夏場の海水浴一

辺倒の観光からの脱却に成功している。

従来の「自然(海)・食」だけではなく、「サイクル(健康)」の島としてのイメージアップにもなった。

また、恒例行事として住民にも深く浸透し、地域総がかりで取り組む機運が出来上がり、新たな民間主導のイベントとして、「支國ウォーク」が始まるなど、広域連携のすそ野が広がっている。

具体的活動

- ・壱岐サイクルフェスティバル
- (平成元年二月設立、八十人)



三十*位のスタート



検車コーナー

次世代型都市情報交流システムに向けて

大和市は神奈川県ほぼ中央に位置し、都心から一時間、横浜から三十分の交通の利便性がとても良い都市で、地域のほとんどが駅からの徒歩圏にある。それゆえ、高度成長期には急激な都市開発や人口の急増を経験した。現在の人口は約二十万人程度で推移している。

大和市の主な政策テーマは、市民参加のまちづくりによる地域の再生である。地域での市民参加を進めようとしても、交通の利便性ゆえに昼間人口が東京や横浜に流出してしまう。市民の知識水準は高く、行政への参加意識も極めて高い地域であるにもかかわらず、世帯の中心となる世代は、仕事や勉学で地理的、時間的な制約を抱えていて、市民参加ができていない。

市内には、情報関連企業が多く立地し、情報政策への市民の理解は比較的可得やすい地域である。一般市民のイン



大和市長
土屋侯保

ターネットの普及率も、一九九八年の調査では人口当たり一五・一％に達している。

このような背景から、大和市においては、どこからでもアクセスが可能なインターネットによる市民参加に力をつけている。

バリアフリー

情報コミュニティ

大和市では、九八年に「バリアフリー情報コミュニティ」(愛称・KOKORON)と名付けて、市役所、市立病院、保健福祉センター、消防本部の大型四施設のLAN整備を実施し、また市内の全公共施設七十五施設において、インターネット、イントラネットが利用可能な情報基盤整備を実施した。二〇〇〇年十二月現在、行政用八百六十五台、市民利用八百七十二台、計一千七百三十七台の端末が、このネットワーク上で稼働している。

この環境を有効に活用するため、各課にはネットワークリーダーを置いて、各課の情報化を推進したり、職員のパソコン活用や操作のスキルアップに努めている。ホームページは各課長の権

限で担当者が作成に当たり、効率的にホームページを公開できる分散型の体制で日々の行政情報の公開と蓄積に取り組んでいる。

また、市民の皆さまからの電子メールなどによる要望・意見を、各課あてや担当者個人あてで受け取ることににより、即時性のある情報提供を行い、通常窓口で対応するのと変わらないサービスに努めている。

さらに、多くの人にIT文化に親しんでいただけるよう、市内のすべての小中学校にインターネットへの接続環境の提供をしたり、図書館・学習セン

ターなどの社会教育施設に自由にネットサーフィンができる市民端末を設置している。これにより、市民の電子行政情報へのアクセス機会を保障するとともに、未来を担う子供たちの情報教育を積極的に推進している。

情報基盤を整備してからは、市のホームページの数は飛躍的に増え、基盤整備前のページ数は約千ページであったものが、わずか一年間で四千五百ページとなり、現在も日々増加し続けている。トップページへのアクセス数も九六年度には月平均八百三十六件であったが、市独自のサーバを設置して以降、

●成功のポイント

95 年より積極的にインターネットの活用を進めてきた結果、職員自らの発想や創意工夫であらゆるホームページが出来上がっている。iモードから市役所へアクセスできる携帯市役所「親切丁寧」と、市内の芸術家の作品やサークルなどを紹介している「やまとインターネット美術館」、申請書類などの書式がダウンロードできる「書式サービス申請堂」などなど。

当初はこのようなサービスが生まれるとは思ってなかった。上司にはパソコンを触っていることがゲームをしているように思われ、ホームページ作成はこっそり作業していたくらいである。

しかし、インターネットは有効な情報ツールであるとの確信のもと、さまざまな場面で利用してきた結果、今では上司自らがホームページを作成してしまう。職員対象のパソコン研修などは、新採用の職員が諸先輩職員に操作の指導にあたるなど、今までの枠組みでは考えられないことが起きている。

IT時代はまさに創意工夫がカギとなる。枠組みにとらわれない姿勢で、情報政策を推進したいと考えている。

●大和市情報政策課

月間二千〜三千件となり、全公共施設がインターネットに接続されてからは月間九千〜一万三千件、さらに二〇〇〇年七月には四万一千件と、アクセス数は他の自治体とは比べものにならないほどに活発なものになっている。

電子情報交流システム どこでもコミュニティ

きた。
その結果として、地域社会での説明会などの会合に参加いただく数よりも十倍以上の市民参加を得ることができるといふ成果を上げ、二〇〇〇年一月にはインターネットによる市民参加のツール「どこでもコミュニティ」(電子情報交流システム)の運用を開始した。

行政事務の効率化を情報政策の柱に掲げる自治体は数多いが、大和市は他の自治体にはない、市民との情報交流を情報政策の前面に掲げ、参加型情報政策のパイオニアを常に目指している。
大和市は、九四年策定の「やまと情報化プラン」、九七年に策定した「インターネット活用戦略計画」をもとに情

アクセスはわずかであることがわかった。一方、女性や若年層、高齢者がインターネットの環境を持たないことで、これらの人たちは行政情報の受信や市民参加が難しい様子がわかる。
良質なインターネット環境を持つ者と持たざる者との間で、情報格差が生じ始めている。情報分野は、犬の成長の速さになぞらえて「ドッグイヤー」とも呼ばれ、一年が三カ月のスピードで進むとも言われている。何らかの手立てを行わないと、情報格差が拡大されることも懸念され、そのためには安価な高速回線の普及が急務である。



(上)図書館の蔵書検索タッチパネル
(中)市役所1階の市民端末機
(下)小学校のPCルーム

大和市は、九五年十一月に日本で初めて、都市計画マスタープランの策定にあたり、インターネットを活用して、市民の意見や要望を集め、計画づくりに反映させた。それ以来、まちづくり条例の制定や総合計画の見直しなど、数多くの場面でホームページを活用した政策過程への市民参加に取り組ん

これは、市民から電子コミュニティへ情報発信された内容が、あらかじめ登録されている市民へはもとより、職員全員に配信されるシステムである。市民との情報の共有と交流を活発に行い、その地域にふさわしい行政を市民とのコラボレーションによりつくり上げようとしている。

報政策を進めてきたが、ほぼすべての事業を達成してきた。今年度からは、新しいプランを二〇〇一年度中に策定すべく準備を始めている。
ホームページへのアクセス状況や市民端末の利用状況などを分析すると、高速回線を利用しているアクセスが約八割を占め、ダイアルアップ接続利用の

大和市はコミュニティを基礎として、今後も次世代型都市情報交流システムの構築を目指す。そのために、市民、企業、行政による情報交流をより活発にする都市情報センターを整備したり、市内に光ケーブル網を敷設するなど、総合的な都市情報交流システムの構築に取り組むと考えている。

東村情報センターを整備

概要

情報化社会に迅速に対応するため、地域・行政情報の受発信基地として「東村情報センター」を整備し、センターと幼稚園、保育園、児童館、小学校、給食センター、中央公民館、図書館、村営プール、老人福祉センター、廃棄物処理場を高速通信網でネットワーク化。画像情報、音声情報、文字情報などのマルチメディアによる情報サービスを平成十二年四月から運用開始

している。

具体的には、インターネットのホームページによるサービスとして、①公共施設予約②図書館蔵書検索③生涯学習（各種団体や講師の情報などをデータベース化したもの）④各種申請書や地図のダウンロード⑤情報提供（各種行政情報、イベント情報、暮らしの情報など）がある。また、各種行政手続きや相談を単一の窓口で行う総合窓口サービスにも利用している。

成果

ホームページのアクセス数は一日当たり約五十件、登録された自主サークル数は六十一団体に上る。優れている点

情報提供はホームページを中心としているが、パソコンを持たない家庭や、操作が不得手な人のために、電話・FAX応答システムを構築し、また図書館にはタッチパネルで簡単に操作できる公共パソコンを設置している。情報の入力・更新は役場内の各担当者自身が行い、最新かつ詳細な情報の提供に努めている。



図書館内のタッチパネル操作の公共パソコン

塩尻情報プラザの外観



情報プラザ内のマルチメディア工房



情報プラザと光幹線網整備

概要

地域情報基盤の整備促進のため、高速通信回線に接続して簡単に高度情報通信社会を体感できる「塩尻情報プラザ」を整備。また、地域ネットワークによって、市民生活の利便性を高め、教育・文化・福祉・企業活動を活性化させるための「市内光幹線網」を整備。さらに、市民や企業のインターネット活用を図るために「塩尻インターネット接続機構」をつくった。これらは平成十二年四月に運用を開始した。

成果

情報化プラザでは、情報化のための研修会、体験ギャラリー、技術相談などを恒常的に実施・開放している。

また、市内光幹線網の利用では、国や民間企業が行う高度情報化のためのハード・ソフト開発実験プロジェクトに参加したり、本庁や支所、学校、在宅介護支援施設を結んで、行政情報ネットワークや教育学習ネットワーク、おもいやり介護ネットワークを推進している。インターネット接続機構では、市民や企業、団体のネットワークとして活用されている。

優れている点

これらの地域情報基盤のすべてを市が実施することによって、人材育成、技術の定着と普及、さらには民間にも情報化ニーズの増大による投資促進といった効果が表れている。

パソコンを使った授業(園部第二小学校)



京都府園部町 地域インターネットシステム整備

概要

CATVをLANとして使用し、情報通信を行う「CATV-LAN」を整備し、地域インターネットを構築。平成十年十一月から運用している。

現在、家庭や学校、公共施設など約四百五十カ所、約六百台のパソコンが接続され、農業情報、行政情報、図書館や博物館などの情報をはじめ、遠隔教育、インターネット、電子メールなどに利用されている。

このうち、情報通信拠点施設である

「園部マルチメディアセンター」は、

歴史資料の視聴・閲覧やCD-ROMによる電子出版物の閲覧、インターネットを利用した学習支援、パソコン研修、コンテンツを制作できる工房機能を備えている。

成果

インターネット無料体験会、ホームページ作成講座、パソコン研修など多くの町民が参加している。CATV-LANにつながっている六小中学校が、それぞれホームページを開設している。町民の情報化への関心が高まっている。

優れている点

自前の情報通信網によって、全町的に情報通信コストが削減されている。CATV-LANに接続すれば、電話代やプロバイダ料金は不要で、時間や料金を気にしないで利用できるため、教育現場で大きな力を発揮している。

また、国のマルチメディア関連の実証実験に参画しているため、大学の公開講座を利用できるなど、全国でもまれな先進の情報通信の町となっている。

島根県赤来町

地域情報通信システムを整備

概要

CATV網を利用した地域情報通信システムを構築し、平成十一年八月から運用している。

中心は放送センターだが、このシステムでは、まず「ケーブルインターネット」が利用でき、「高速・常時接続」という環境が安価な定額料金で利用できる。また、各家庭や公共施設からパソコンでDVD、LDなどのソフトをリクエストして視聴できる「ビデオ・オン・デマンド」の機能がある。

さらに町の自主放送による地域の出来事や各種情報を提供する通常の有線放送機能に加え、とくに伝えたい情報

を前もって設定されているグループにのみ告知することができ「告知放送のグループ機能」もある。このほか「テレビ会議システム」や、放送センター内でハイビジョン映像を視聴できる「ハイビジョンプレゼンテーションシステム」も備えている。

成果

平成九年八月から開発したCATV網が全世帯の九九・九%の加入率に達し、学校教育や企業での活用や、若者の定住にも大きな役割を果たしている。

優れている点

大容量の情報の受発信が、常時接続で安価な定額料金で実現できる。



(上)センター研修室でのパソコン教室
(下)センター開局イベント小学生対象の「トンボの学校」

町では自主放送に力を入れていて、とくに告知放送のグループ機能は地域コミュニティの向上に大きな役割を果たしている。

平成
12年度

地域活力創出プラン関連事業(当初分)について

1 はじめに

地方行政にとって現下の重要課題は、地域の自立を図り、分権型社会の実現を目指すことであるが、それには、経済基盤の強化、地域を支える人づくり、ネットワーク化などにより地域の活力を創出していくことが必要である。この場合、地方公共団体が地域の特色を生かしつつ、その創意に基づき、総合的な取り組みを行うことがとくに重要であるが、地域活力創出プランは、そのような地方公共団体の自主的な取り組みを支援することを目的とするものであり、「地域経済新生」「人づくり事業」「広域連携事業」などに対し、ハード・ソフト両面から重点的な財政措置を講じているものである。

2 ソフト事業に対する財政措置

地方公共団体が地域の活力創出を目指し、それぞれの地域の特色を生かし、また、地域の創意に基づき総合的な取り組みを行うことができるよう、ソフト事業に要する経費につ

いて包括的な財政措置を講じることとしている。具体的には、農産物の生産、加工、流通、販売を一貫して事業化(六次産業化)する取り組み、ベンチャー企業の創業、事業化支援などの「地域経済新生」の取り組みおよび地方への移住・定住の促進、地方公共団体における人材の誘致・活用・育成、地域における共生などの「人づくり事業」の取り組みに要する経費について、地方交付税措置を行って

3 ハード事業に対する財政措置

地方公共団体が地域の活力創出を目指し、その創意に基づき実施する地方単独事業に対し、地域総合整備事業債による財政措置を講じている。具体的な事業としては、次のとおりである。

① 地域活力創出事業

地域経済新生(貸しラボ、加工施設、直販施設など)、人づくり(移住者用貸付住宅など)、広域連携など

※本年度より、新地域経済基盤強化対策推

進地域(「新地域経済基盤強化対策要綱」(平成十二年一月十九日付け自治画第二号)による)における地域経済基盤強化のための公共施設の整備事業を追加。

② 共生のまち推進事業

ユニバーサルデザインによるまちづくり、地域の保健福祉増進のための施設整備など

③ 地域情報通信基盤整備事業

光ファイバーなどのネットワーク整備など

※本年度より、デジタル・ミュージアム構想の推進(平成十二年四月二十八日付け自治情第七十二号)に資するシステム(ハード)整備事業を追加。

平成12年度の

4 地域活力創出プラン関連事業ハード事業(当初分)について

平成十二年度における地域活力創出プラン関連事業(当初分)の概要は、表1のとおりである。事業数は、新規事業二百七十四事業、継続事業二百九十二事業の計五百六十六事業であり、その総事業費は五千四百五十四億円となっている。

表1 平成12年度地域活力創出プラン関連事業(当初分)概要 (単位:億円)

区 分	項 目	事業数	団体数	総事業費	うち12年度
新規	都道府県	33	27	491	136
	指定都市	10	8	103	31
	市町村	231	298	702	283
	新規計	274	333	1,296	450
継続	都道府県	44	35	1,432	309
	指定都市	13	7	636	102
	市町村	235	253	2,090	920
	継続計	292	295	4,158	1,331
合 計		566		5,454	1,781

表2 新規事業の特色 (単位:億円/構成比:%)

事業分類		事業数		総事業費		12年度事業費	
			構成比		構成比		構成比
地域活力創出事業	①地域経済新生（貸しラボ、加工施設、直販施設等）	15	5.5	77	5.9	39	8.7
	②人づくり関係（貸付住宅、移住者との交流施設等）	12	4.4	24	1.9	17	3.8
	③広域連携（観光資源の広域的活用、施設の共同設置等）	7	2.6	183	14.1	33	7.3
共生のまち推進事業	④ユニバーサルデザインによるまちづくり	168	61.3	381	29.4	157	34.9
	⑤地域の保健福祉増進のための施設整備	59	21.5	500	38.6	168	37.3
	⑥大学・短期大学である看護婦等の養成のための施設	2	0.7	76	5.9	8	1.8
	⑦NPO等の活動支援のための施設整備	3	1.1	3	0.2	2	0.4
地域情報通信基盤	⑧衛星通信ネットワークの活用による地球局等の設置	2	0.7	40	3.1	16	3.6
	⑨行政情報の提供等を目的とするCATV施設の整備	2	0.7	3	0.2	1	0.2
	⑩光ファイバー等のネットワーク、地域情報拠点施設の整備	4	1.5	9	0.7	9	2.0
合 計		274	100.0	1,296	100.0	450	100.0



地域の情報化を支援するための施設の例

表2は新規事業を分類したものであり、事業数では昨年度に引き続き、ユニバーサルデザインによるまちづくり、地域の保健福祉増進のための施設整備が多く、事業費でもユニバーサルデザインによるまちづくり、地域の保健福祉増進のための施設整備が大きくなっている。

5 平成12年度の新規事業(当初分)例示

以下、平成12年度における新規事業を例示する。

①地域経済新生(貸しラボ、加工施設、直販施設など)
福岡県大牟田市Ⅱ大牟田スタートアップセンター(仮称)整備事業
三池炭坑閉山後、かつての鉱業都市から産業創造都市へ飛躍するため、起業家や既存企業の新規事業展開などを支援するための貸し工場を整備する。
滋賀県竜王町Ⅱ(仮称)竜王町農と文化ふれあいの郷(鏡の里)整備事業
国道沿いに、地域経済の活性化を促す町の

情報発信の基地となりうる施設を配置し、来訪者との交流や施設利用者への休息場所の提供などの機能を備えた施設として整備する。
②人づくり関係(貸付住宅、移住者との交流施設など)
徳島県西祖谷山村Ⅱ若者定住環境基盤整備事業
山間急傾斜地の多い村内において、比較的緩やかな地形の村の中心部に活性化の動きを積極的にサポートし、若者定住の促進を図ることを目的として、移住者・定住者向けの貸

付住宅を整備する。

③広域連携（観光資源の広域的活用、施設の共同設置など）

千葉県八日市場市Ⅱ（仮称）八日市場市都市と農村総合交流ターミナル整備事業

緑あふれる広大な田園風景の中に農業体験・研修施設のほか、農産物や加工品の展示紹介施設、イベント広場、さらには全国屈指の生産を誇る特産の植木の展示見本園などを複合的に整備する。

④ユニバーサルデザインによるまちづくり
富山県Ⅱすべての人にやさしいまちづくり事業

公園や学校、警察署といった県有施設において、スロープや多機能トイレ、エレベーターの設置、歩道の段差解消などを一体的に行う。

⑤地域の保健福祉増進のための施設整備
沖縄県Ⅱ沖縄県総合福祉センター整備事業

地域住民、民間団体および地方公共団体が一体となって、新たな課題に対応した地域福祉を推進するため、ふれあい交流機能（コミュニティホールなど）、情報サービス提供機能（福祉情報センターなど）、ボランティア活動の振興機能（ボランティアセンター）などを備えた拠点を整備する。

⑥大学・短期大学である看護婦等の養成のため

中小企業を支援するための施設の例



めの施設

福岡県Ⅱ福岡県立大学看護学部整備事業

資質の高い看護職員を養成し、県民の保健・医療・福祉の向上に貢献するため、既存の県立大学に看護学部を開設することとし、そのための講義室、実習室、福利厚生施設などを整備する。

⑦NPO等の活動支援のための施設整備

宮城県ⅡNPO活動促進中核機能拠点整備事業
NPO活動の総合的な支援や行政とのパートナーシップの確立を目的として、「NPO活動促進中核機能拠点」を整備し、NPO活動のための情報提供や調査研究を行う。

⑧衛星通信ネットワークの活用による地球局等の設置

奈良県奈良市ほか38件Ⅱ総合情報通信ネットワーク事業

県内市町村に衛星地球局を設置し、衛星通信ネットワークの活用による高度な情報通信基盤を整備する。

⑨行政情報の提供等を目的とするCATV施設の整備

京都府加悦町ⅡCATVセンター建設事業

新たにCATVセンターを設置し、行政情報番組などを提供するシステムを高度情報化（デジタル化、在宅介護支援システムなど）に対応可能にするため周辺機器を整備する。

⑩光ファイバー等のネットワーク、地域情報拠点施設の整備

岩手県Ⅱいわて情報ハイウェイ整備事業

いわて情報ハイウェイの基幹部分となるように、県内の中核的病院および県内大学などにネットワークを整備する。テレビ会議システムを活用した遠隔医療支援システムや、大学間の交流や遠隔講義などを実施する。

●東北コース

こだわり、粘り強さが まちづくりの原点

先進地で成功の要因を見る

東北コースは、森塾長をはじめ、塾生十人、事務局三人の総勢十四人が昨年十一月十四日から四日間の日程で、岩手、青森県内の地域づくり先進地を視察研修した。私にとつては、まちづくりはこだわりと粘り強さと自信こそがまさに原点だと感じた研修であった。

最初の訪問地、岩手県葛巻町は、酪農と林業の町である。ワイン工場や風力発電など四つの第三セクターを設立し、二百二十人余りの雇用を創出している。そのうち、千百軒を管理する「葛巻町畜産公社」では、体験研修としてアイスクリームづくりに参加者全員が挑戦した。また、地域おこしグループが開いている「森のそば屋」さんでは、ソバを耕作し、水車で粉をひき、ソバを打つ

作業を見せていただき、働いているお母さんやおばあちゃんの生きがいの場となっていることに感動した。

二日目に訪れたのは同県山形村の山村文化を体験できる「バッテリー村」。バッテリーとは水の力で石臼をつく道具のことで、ここでは木藤古徳一朗村長さんの地域づくりにかける情熱を拝聴した。その中で「自治体職員は常に燃えていなければならぬ」「地域にまちづくりの灯火をつける役割がある」と言われたことは、バッテリー村活動を十五年間積み重ねてこられた木藤古村長ならではの重みを感じた。

次に訪れた同県大野村は「一人一芸の里」を標ぼうしており、その拠点が大野キャンパス。産業デザインセンター、産直施設「有機の里」、

パークゴルフ場、宿泊施設などを広大な面積に配置。「まちづくりは人づくり」をモットーにまちづくりを進めており、木工、陶芸、ガラスや裂き織りの工房を整備し、雇用による定住人口増を図っているという。

三日目は青森県に向かい、まず訪れたのは田子町。日本一のニンニクの産地である。ニンニクの文献を収集し、加工品の展示販売をするガリックセンターを整備したり、郵便ポストの屋根にニンニクの模型を付けているほど、特産品にこだわった地域づくりを進めているのには感心してしまった。

次の名川町では工藤祐直町長さんから農産物直売所である「チェリーセンター」の運営方法などを教えていただいた。成功した要因は「立地条件、品数の豊富さ、安価、鮮度、それに生産者の販売する欲び」とのお話を聞き、なるほどとうなずいた。

最後の訪問地の同県八戸市は、新幹線が平成十四年十二月開業予定であり、高速道路と併せた陸上交通、さらに三沢空港からの空の交通、苦小牧、室蘭へのフェリー就航の海上交通と、交通体系が整備されている。

昨年四月オープンした八戸広域市

町村圏事務組合のリサイクルプラザを見学したが、住民は資源ごみを細かく分別して出す必要はなく、リサイクルプラザで缶、びん、ペットボトルなどに分けており、収集体制の簡易さに驚いた。資源循環型社会へ



岩手県山形村の「バッテリー村」木藤古村長(前列左から2人目)を囲んで

大西主男



徳島県井川町
企画財政課長

の転換のためにと、ごみを出す住民側に多大な負担をいとも簡単に転嫁している行政が多い中で、特異なごみ行政には感心させられた。

地域 だより

OLに聞いた「素敵な店」
佐賀の三毛がマップ作成

佐賀市の第三セクター「まちづくり佐賀」はこのほど、市内のOL百人にアンケートして、味や雰囲気が良い店を紹介した「Lunch&Dinner RECOMMEND MAP」(OLおすすめの店マップ)を発行した。

A3サイズで、市の中心街の地図をイラスト風に描き、「喫茶・軽食」「和食」「洋食」「飲めて食事も」「持ち帰り」の五つの分類で約四十店を紹介している。アンケート中心なので、一番人気の店のほか、隠れた人気の店も掲載しているという。地図は市内の全戸に配布した。

創業支援オフィスを開設
荒川区中学校校舎を活用

東京都荒川区は、学校統合で空く中学校校舎を利用し、IT関連事業などの創業支援

や企業間ネットワークづくりのための貸しオフィス施設「西日暮里スタートアップ・オフィス」(仮称)を十月に開設する。創業支援オフィスに生まれ変わるのは三月で閉校する道灌山中学校。教室などを改修し、二十室つくる。

光ファイバーなどの高速通信インフラを完備する予定で、各室には高速通信回線への接続装置を設置し、共用施設として「インターネットスポット」を用意する。オフィスの使用料は一万円の予定。

笑顔がいちばんノ放送予定

●3月4日
岐阜県多治見市、八幡町
郡上八幡 冬の風物詩

●3月11日
大分県日田市、佐賀関町
天領日田のひなまつり

●3月18日
山口県宇部市、下関市
緑と花と彫刻のまち

●3月25日
総編集 もう一度見てみたい!
あの町あの笑顔

TBS系、毎週日曜日
午前7時~午前7時30分
*一部で放送日時が異なる地域があります。

センター 通信

◇当センター常務理事に
柳原氏

「地域活性化センター」は二月十五日に評議員会を開き、十六日付で理事に柳原瑛・前地方公務員共済組合連合会理事を選任。同日付で常務に任命した。柳原氏は昭和四十二年自治省入省、大臣官房審議官などを務めた。大平充夫前常務理事は自動車安全運転センター理事に就任した。

首長来訪

▼岡山県津山市 中尾嘉伸市長 (1月11日)
▼富山県八尾町 吉村栄二町長 (1月18日)
▼埼玉県羽生市 今成守雄市長 (1月18日)
▼福井県大野市 天谷光治市長 (1月24日)

●(訂正)一月号十六ページの筆者名「井関友伸」氏は「伊関友伸」氏の誤りでした。おわびし、訂正します。

地域産品・観光おこし 出前研修会を募集

「地域活性化センター」では、地方公共団体などの物産・観光担当に対し、地域の特性や埋もれている資源を掘り起こし、それらを生かした新たな観光資源づくり、産品開発、またそれらを地域づくりに結び付けるための実践的な着眼点や手法などの取得を目的とした研修会を、全国各地で開催しております。

この研修会は、地方公共団体などが希望する日程、会場で、地域産品および観光の専門家による基調講演、ビデオ教材を用いたグループ演習を実施し、参加者はその地域に根ざした新たな地域づくりの手法などを身に付けることができます。

より多くの物産、観光担当者を育て、地域に根ざした産品開発、まちづくりの第一歩を踏み出す手がかりとして、地方公共団体などからの応募をお待ちしております。

黒潮塾 「八重山の可能性を探る・パート3」に活用



グループ演習の様子
(石垣市役所内会議室)

本年1月16日に八重山広域市町村圏事務組合(沖縄県)の人材育成事業として開催された黒潮塾において、当研修会を活用いただきました。

参加者は、物産・観光振興に取り組んでいる地方公共団体の職員や実務者の方々約20人で、ビデオ上映、グループ演習の後、グリーンビジネスプロデューサーの鈴木俊博氏が講評および講義をしました。

参加いただいた方からは、「地域にあった講義であり、参考になった」「参加型の研修会であり、有意義であった」といった声も寄せられており、大いに実りある研修会であったと自負しております。



東北公益文科大学

Tohoku University of Community Service and Science

公益を学ぶ日本初の大学

世の中みんなにとってよい社会とは何か。
一人の人間として社会に何ができるのか。
社会を支える実践的な人材を育成する新しい大学が
山形県酒田市に誕生します。

公益学部／公益学科・経営系・社会系・環境系

2001年4月開学



慶應義塾大学先端生命科学研究所

慶應義塾の知的支援



慶應義塾
既設5キャンパス
との密接な協力

慶應義塾は、地方自治体などと連携して開設運営する
新時代の教育研究施設「タウンキャンパス」構想として、山形県鶴岡市に
TTCK (TSURUOKA TOWN CAMPUS OF KEIO)
を2001年4月に開設します。
その中核となる先端生命科学研究所は、バイオインフォマティクス
などの先端的な研究に取り組みます。

東北公益文科大学 〒998-0044 酒田市中町二丁目5番19号 tel.0234-26-5822 fax.0234-26-5750
E-mail:koeki-u@sage.ocn.ne.jp URL:http://www.koeki-u.com

手前
ですが...

⑦高知県橋原町

雲の上の町 ゆすはら



四万十川源流域に位置する「雲の上の町ゆすはら」は、総面積二百三十六平方キで、うち九一%を林野が占める自然豊かな山村です。

この豊かな自然を守り、自然と共生する地域づくりを目指し、新エネルギー導入に取り組んでいます。

●風力発電システム

標高千三百メートルの四国カルスト高原に流れる風を生かしての風力発電システムは、年間発電量三百七十万キロワット/時で本町の使用する電力の二五%を発電しています。

青い空と緑の牧場、白い羽根の描くコントラストは、自然にマッチし、観光や環境面でのPRの役を担っています。

●地熱利用の温水プール

地下百メートルの地熱を利用した温水プールは、健康づくりや体力づくりに有効で、町内外を問わず静かなブームとなっています。

このように、先代から受け継いだ環境を次代へ引き継ぐため、地球に優しい取り組みを進めています。

3月イベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

3月14日～16日
上山市（山形県）

3月26日～28日
草加市（埼玉県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

3月5日～16日
富山県

3月21日～3月29日
弘前市（青森県）



1月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

1月16日～18日
小坂町（岐阜県）
飛騨小坂観光物産展①

1月25日～26日
温海町（山形県）
温海町の観光と物産展②

1月29日～30日
飯南町（三重県）
いいなん茶のPR

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

1月4日～12日
神戸市（兵庫県）
神戸21世紀・復興記念事業のご案内

1月15日～25日
岡崎市（愛知県）
観光PR展

1月29日～2月9日
秋田市・盛岡市・宮古市
地域連携軸 秋田・盛岡・宮古
観光物産展③

■編集後記

▼ふるさとづくりの原動力とは何だろう。トップの決断、担当者の着想。そして第一歩を踏み出すときも、持続し、拡大させていくときも、大きなエネルギーが要求される。共通して言えるのは、踏み出す勇氣と、人びとを結集させる実行力。これらの総体が原動力かもしれない。今年度も地域づくり自治大臣表彰が決まり、先ごろ表彰式が行われた。今回の受賞団体数は四十三団体と、これまでよりはスリム化し、一層、狭き門となったようだ。

▼今回の表彰特集は、編集・構成を従来の表彰特集とは少し趣を変えてみた。表彰式で意見発表した団体を中心に報告原稿の執筆をお願いし、併せて「何が原動力となったか」「陰の苦心談」といったことを「成功のポイント」としてコラム風に書いていただいたことである。このコラムから、ふるさとづくりのヒントをくみ取っていただければと思う。そのほかの団体については、編集部で紹介記事をまとめた。

▼自治大臣表彰の特集のために、「団体探訪」「女性パワー」は休載させていただきました。ご了承ください。（地平線）

●4月号予告

特集Ⅱ 逆転の発想でまちおこし

地域づくり3月号

平成13年3月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131代 http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/

印刷＝大日本印刷株式会社

ス ウ イ ー ト な 夢 。 いろいろ

2億・3億円を手にするかも知れないジャンボ宝くじ。

数字を選んで当てるナンバーズやミニロト、ロト6。

すばやく当たりがわかるインスタントくじ。

夢をコツコツ楽しむ100円くじや

季節ごとの名前がついた宝くじ、などなど……。

より多くの方の心に、もっといろんな夢を。

そんな願いから宝くじは種類も楽しさも多彩に広がってきています。

そして、21世紀。

宝くじが目指す粒よりの夢たちにどうぞご期待ください。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。